COBALT-SERIES

前田珠子



千年の古戀

いにしえこいうた 古戀唄4

集英社

COBALT-SERIES

天を支える者

古戀唄（いにしえこいうた）3

前田珠子



集英社



COBALT-SERIES

天を支える者

古戀唄(いにしこいうた) 4

前田珠子

集英社

目　次

天を支える者　古(いにしえ)戀唄(こいうた)4

天を支える者　古戀唄4 …… 7

あとがき …… 196



登場人物紹介


フィオーン王子
クランクレイアの兄で
ディエーン王国の
王位継承者。
ギスカリール
ハーリクとも高貴な人々
とも親しい謎の青年。
ハーリク
ガジェスの親友。
実家は土産物屋。

イラスト／明咲トウル

天を支える者

古戀唄（いにしえこいうた）4

28

天地がひっくり返るような衝撃というものを、その時まで、アマンシールは知らなかった。

歴史を題材にした大河小説などで、そうした表現を目にしたことはあったものの、内心（大袈裟な……）とか、（余程、感情の起伏が激しいんだな、この男）とか思っていた彼は、現実にそんなものは自分とは無縁だとまで思っていた。

もちろん、クランクレイアとのことでは、彼女の一挙手一投足にハラハラさせられたり、狼狽えたり、ドキドキしたりしたのだけれど……今回襲ってきたのは、そんなものとは次元が全然違っていたのだ。

兄が怪我をしたと言われ、大事な試験中にも拘わらず、学院を出て屋敷に戻ったと

ころ、待っていたのは怪我ひとつないピンピンしたふたりの兄で……ところが、彼らは揃いも揃って固い顔で、「父上と客人が待っておられる」と告げた。

さては、父の差し金だったのかと思い、憤然たる思いでふたりが待つと言う応接間に向かったアマンシールは、客人が何者かも知らぬ内に、とんでもないことを宣告された。

『ガジェストリオ・アマンシール・アルス・ファラスース殿。あなたは正しく次代のディエーンの守護者となり得る資質をお持ちでいらっしゃる……そして』

その台詞だけでも最悪だと思ったのに、続けられた内容は、そんな言葉で言い尽くせるようなものではなかった。

『同じ資質をお持ちの方々のなかで、最も強い輝きを放ってらっしゃるあなたこそが、間違いなくディエーンの安寧の灯を継がれるお方となりましょう……』

人間、あまりにも突拍子もないことを聞かされると、頭が理解することを拒否するものらしく、このときの彼がまさにそうだった。

恋愛に疎いせいで、クランクレイアやフィオーンの言葉を理解できなかったことは

確かに何度もあったけれど、このときとは全く状況が違っていた。

アマンシールは、相手がなにを告げているのか、内容はわかっていたのだ。しかし、それに対する認識が、全然一向に湧いてこなかった。

いや、認めることを頭が拒絶していたとしか思えない。

「ご冗談を」

と、言いかけた彼の舌は、凍り付いたように動かなかった。

脳裏に、帰宅した自分を出迎えてくれた、ふたりの兄の沈痛な面持ちが甦る——そして、つい救いを求めるように目を向けた先で……父リュシアンドもまた、深刻な表情で黙りこんでいた。

その沈黙が、なにより雄弁に、この冗談としか思えない事態が、現実なのだと彼に知らしめた。

尊き虹神より、次代の柱神を過たず見極める役目を下されたという老人は、ウァランセイド・セルクール・レンス・セディシャと名乗った——。

ウァランセイド・セディシャは、変人として知る人ぞ知る存在だった。

神学院開学以来の成績で入学を果たしたにも拘わらず、彼は専門科目を選べるようになったころには、その成績に大きな偏りを見せるようになっていた。

すなわち、必須課程は及第ぎりぎりのくせに、意欲を持って選択した講義の成績は抜群だったのだ。

下級とはいえ、由緒だけはある貴族である彼の両親は、五男に生まれた彼のために、彼らなりの思いやりをもって、その進路を提示したのではあろうが、神官となり、公にこそできないものの、誰も無視し得ぬ力を持たせたいという親たちの希望は、ウァランセイドのそれとは大きくかけ離れていた。

主席入学を果たしながら、結局落ちこぼれと見なされる存在になっていく彼の様子に、両親及び兄弟たちの期待は薄まるだけ薄まった。

それが決定的となったのは、彼が神学院の卒業を前に、神官となることを望まず、

付属の研究施設に残りたい旨を伝えたときだった。

父であるセディシャ子爵は「お前はあたら恵まれたその才を、ドブに捨てるつもりなのか!?」と激怒した。

母は「父祖が築いてきたこの家を、お前は守ろうとは思わないのですか!?」と責め立ててきた。

かすかな良心の呵責こそ覚えたものの、彼は両親の望む未来のために、自身の心を曲げる気にはなれなかった。

自分がセディシャ家の唯一の子供であったなら、また上の兄たちが家を潰すに違いないと確信できるほどに凡愚であったなら、聞く耳も持っただろうが、末弟であるウァランセイドの目から見ても、兄たちは申し分なく、実家をもり立てていけるだけの才覚に恵まれたひとたちであると思えたのだ。

実際のところ、兄たちは、彼の突拍子もない進路希望にうなずいてくれた。

「天才とは言っても、向き不向きはあるわけだしな」

「向いてない方面に、無理に向かわせようとしても、潰れるか歪むに決まってるし」

「あー、こんな弟が、突然逆ギレして牙むき出しにしてくる様なんて、みたくない」
「見たくないっつーより、真剣対峙したくないぞ、おれは」
「おれも」
「わたしもだ」
かくして、復讐恐ろしさに、末弟の自由意志による進路を認めた上で、両親の説得まで買って出てくれた兄弟への、感謝を忘れたことはないヴァランセイドだったのだが――。
（まさか……半世紀も経ったいま、かつての自分とそっくりな若者と巡り会おうとは思いもしなかった……）
その出自は、自分などより余程に高く、自分以上に自由な魂の持ち主だった。
彼の心を挫くような真似はしたくはなかった。
けれども、その姿を一目目にした途端に襲われた、心ごと跪かせる圧倒的な力には抗えなかった。
兄弟たちの理解を得、神殿にあって、毒にも薬にもならない知識の収集に埋没する

日々を許されて、幾星霜……。

生き字引としての役割しか認められなくなって久しいある日、ある時――大仰に装った、かつての同期生で、いまは黄神神殿の頂点に位置する人物の訪問を受けたとき、ウァランセイドは、自らの安らかな日々の終息を悟った。

「そなたしか、考えられないのだ！」

旧友は、そう主張した。

そして、その主張に対して、ウァランセイドは否定の言葉を放つことができなかった。

なぜなら、彼が所有していた神殿発行の神聖硬貨の一枚が……そこに刻まれた創世七神のひとり、黄神の横顔ではなく、その正面からの顔を映したものに変化していたからである。

それは、なによりの証だった。

創世虹神自らにより、ウァランセイドは次代の世界の柱となるべき存在――柱神となるべき存在を見抜き、選定する役目を神から与えられてしまったのだ……。

「何ですか!?　これは一体どういうことなんですか!?」

思考能力が自然解凍されたアマンシールは、盛大な勢いで父とふたりの兄に食ってかかった。

「わたしが次代さまの候補!?　出来の悪い冗談にしか聞こえませんよ!?」

「安心しろ、そう思ってるのはお前だけじゃない」

神妙な面持ちのまま、さりげなく酷い同意の言葉を口にしたのは、長兄チェルギースだった。

これまで、いついかなる時であれ、動じた様子を目にした覚えのない次兄ファバルワースまでもが固い表情を崩さぬまま「まったくだ」と同意した時には、ことの深刻さに注意すべきなのか、それとも彼の懸念の原因――つまるところ、自分なのだが――に思いを馳せるべきなのか、一瞬迷った。

しかし、卓抜した政治力で、ディエーンの重鎮の座を保ちつづけている父の、深い深いため息に気づいた時点で、やはり事態に重きを置くべきだろう、と思った。

なんのことはない、多少は落ち着いたとは言っても、アマンシールはまだまだ混乱の最中にあったのだ。

……もしかしたら、ふたりの兄も同様なのかもしれない。

「……参ったな……」

ぽつりと洩らされた父の一言に、アマンシールは焦りを覚えた。

いまだ、完全に理性的思考を取り戻せてはいないとは言え、この状況がファラス家にとっても、自分にとっても、好ましいものでないことぐらいはわかっていたからだ。

国内でも屈指の名門であり、同時に外交や貿易で、諸外国にも影響力を持つ大家——というのがファラス家の評判だ。

そんな家の直系の息子が、次代柱神の候補に選ばれたと世間に知れれば、それだけで危険だった。

現エルスース王朝を支持する者たちの間では、無闇にファラスース家を警戒する気配が生じるに違いない。

富も権力も名誉も、およそ『臣下』としての最高のものを得た者が、神の眷族を身内から輩出したとしたら……紛れもない最高の地位を望んでもおかしくはなかろう、と――。

否、望まないはずがない、と。

アマンシールは心底からぞっとした。

「で、ですが……！　そのために当代さまにもご協力を仰いだ策がありますよね!?　次代さまの候補を全員、王家の養子に……って、あの案はどうなったんです!?」

「……そのことでも、近々お前を呼び戻そうとは思っていたんだ」

ますます暗い顔になったチェルギースが告げた。

「当代さまのおかげで、神殿上層部も協力態勢に入ってくれたんだが……養子の件は、今回はまず無理だという話を、先日当代さまが直々に書簡でお知らせ下さった。勿論、父上宛だったが、わたしたちも目を通すことを許していただいた。その内容と

いうのが……」

よほど、口にするのが気に進まない内容だったことは、実直で、日頃から口数は少ないものの、言うべきことを躊躇うような性格ではない長兄の、苦り切った顔から知れた。

そんな兄に、助け船を出したのは、同じく書簡を目にしたファバルワースだった。

「今回に限って、よりにもよってとしか思えない候補ばかりが選ばれたらしい。王家から候補が選ばれなかったことだけでも、世間の疑心暗鬼を煽るには充分だというのに、あろうことか、王都の神学院に在学中の、マルシアス家の第二侯子ファリネス殿まで候補に挙がってるっていうんだから……」

自分の身に降りかかった驚天動地の出来事に、未だ混乱から抜け出せずにいたアマンシールだったが、告げられた家名には反応した。

それは……マルシアス家とは、ディエーンにとって異質であると同時に、王権を支持する者たちには決して無視出来ない存在だったからだ。

マルシアス家は、ディエーンの南方に広く豊かな領地を持つ大家なのだが、王家に

仕える諸侯からは、異端視されている。

理由は、単純と言えば単純なのだが、エルスースの前の王家の時代、当時南方に位置していたパースアルと国境付近の紛争が原因で、戦が起こったことがあったのだ。

そのとき、偶然当時のディエーン国王と知遇を得、大いに感服したマルシアス家の当主は、腐敗しきっていた祖国をではなく、ディエーンに領国もろともに忠誠を誓ったのだという。

結果、ディエーン国王は、新たな領土と頼もしい家臣を得たというわけだが、その蜜月は長くはつづかなかった。

つまり……二世紀から三世紀に一度訪れる、柱神の代替わりのせいだ。

それに伴う王朝交代劇を、もともとがディエーン出身でない彼の家の当主と、その領民は認めようとはしなかったのだ。

表面上は、マルシアス家はエルスース家に忠誠を誓った。だが、それが上辺だけのものであるのは明らかだった。

叛意の芽は摘まねばならない——だが、王朝の核を築き上げたばかりのエルスース

家にそれだけの力はなく、またパースアルでも有力貴族であったマルシアス家には、充分自領を守りきるだけの力があった。

結果として新たな王朝を開いたエルスース家は、南の脅威としてマルシアス侯爵家を警戒すると同時に、なんとか懐柔するべく、政略的な婚姻を取り結んできたわけだが、その成果のほどは明らかでない。

「マルシアスの……では、王家がどれほど言葉と心を尽くして説得しても、養子の件など通るはずが……」

「ああ」

苦虫を噛み潰したような顔で、チェルギースがうなずいた。

「だが、一番心配しなくちゃいけないところがどこなのか、当事者であるお前が一番わかってなさそうで、お兄ちゃんはそれが心配だよ」

茶化した物言いのなかに、深刻ななにかを潜ませてきたのはファバルワースだった。

「……どういうことです？」

四年間、本来興味もなかったのに、無理矢理政治や外交や商業のことを学んできたのは、クランクレイアやフィオーンのためだった。

とはいえ、真面目に取り組んできたし、それなりに成果だって収めてきたつもりだというのに、次兄は謎の言葉を投げかけてくる。

「どういう意味なんですか!?」

再度問いかけたアマンシールに、次兄ばかりか、長兄も父も、深いため息をついた。

「……随分改善されたと思ったが……お前の無駄によく働く頭は、あくまで自分には作用しないんだな……」

どういう意味です!?

憤然として問いかけたアマンシールに、三人はしかし疲れ切った顔で、答えることを無言で拒否した。

「そんなこともわからないのか」

事情が事情なものだから、慌てて馴染みの店に――下町の飲み屋兼食堂兼、なにやら怪しげな宿も営んでいるという、なんとも胡散臭いところである――随分年長ながら、クランクレイアと柱神に関してだけは、非常に親身になってくれることがわかっている友人を呼び出し、事情を説明したところ、返ってきたのが前述の台詞だった。

馬鹿にする口調で告げられたのなら、反発を覚えて怒ることもできただろうが、心底哀れむように言われ、なんだかアマンシールはいたたまれなさを感じた。

しかし、父もふたりの兄も説明してくれなかった事情を尋ねられるのは、目の前の万年青年しかいなかった。

「な、なんなんです？」

問うた彼に、ギスカリールはやれやれと肩をすくめ、届いたばかりの鶏の唐揚げを頬張り始めた。

それをきちんと咀嚼し、飲み込まないうちに、声を発したことに、アマンシールは

眉をひそめる。

「ギスカリールさん。口にものを含んだまま、喋るというのは……」

目の前の青年の教育（？）のおかげで、かなり下町風には馴染んだ彼だったが、食べ物を口に入れたままでも平気で喋るということだけは、許容しがたいものを感じていた。

根幹にあるのは、もちろん侯爵家における躾ゆえなのだが、アマンシールは実のところ、その不作法の結果、悲惨な状況を招いてしまった知人との体験があったのだ。

親友であるハーリクは、酒が入るとやたらと思い出話――しかも、ろくでもないことが圧倒的に多い――をしたがる癖のほかに、笑い上戸になるというそれもあった。

それも、単に笑うのではない。

爆笑するのだ。

一度、そのことを知らない、学院の同期生が、ハーリクを飲み会に誘い、その関係でアマンシールも一緒について行った――というか、問答無用で引きずられて行った、というのが正確なところなのだが――ことがあった。

法的に成人と認められた後のことだったから、皆さんざんに、飲んで食った。

そのときの面子の中に、自分や知人の体験談を、実に面白可笑しく脚色できる才能の持ち主がいたのが……まずかったのだ。

最初のころこそ、ハーリクもその酒癖を披露することもなく、楽しく時間は過ぎて行ったのだが、彼が一定量以上の酒を摂取したころに、惨劇は起こった。

件の話し上手な同期生が、酒でますます舌先を滑らかにする体質（と言っていいものかどうか、悩むところだが）だったのが、ますます宜しくなかった。

もはや、箸が転がっても、腹を抱えて大爆笑する状態になったハーリクに、話し上手な友人は、人生最大の失敗を、笑いの要素たっぷりに披露してくれたのだ。

折り悪く……そのときハーリクは「小腹が空いた」と言って、焼き飯を口いっぱいに頬張っていた。

その状況に居合わせた、アマンシールを含む同期生たちが、どんな被害を受けたかは、最早言うまでもなかろう。

不幸中の不幸にも、ハーリクは肺活量に優れた人物だった。

その場に居合わせた友人たちは、ハーリクの愛すべき人格を尊重すべきだという路線に則り、その件に関しては完全に不問に付したわけだが……それ以後、ハーリクを交えた酒食の場に、話し上手な人間が誘われることはなかった。

と、まあ……そんな過去があるものだから、アマンシールはギスカリールの『不調法』に、寛大にはなれなかった。

しかも、そのときのことが――思い出したくもないのに――鮮明に脳裏に甦り、彼は思わず口元を抑えてしまった。

その様子に、さすがにギスカリールも口を尖らせた。

「なにもそこまでイヤな顔することはないだろうに……郷に入れば郷に従えって言葉、知らないのかー？」

「金輪際思い出したくないと思っていたことを思い出してしまっただけです」

連想というシステムを、心から呪いながら答えたアマンシールに、なにか感じるところがあったのか、ギスカリールは咀嚼していた食べ物を飲み込んだ後、「ははー」とうなずいた。

「ありがちっちゃーありがちだが、そいつはまた災難だったな。わかったよ、少ーしばかり行儀良くしてやろう。あ、だが、酒は飲むぞ？」

いまさらな断り文句に、アマンシールはため息まじりに応じた。

「そこまで望んでません」

なにしろ、目の前の万年青年の酒の強さときたら半端ではないのだ。

普通、酒気を帯びると頭の回転が鈍くなるものだが、特別製の内臓と頭を持っているらしいギスカリールは、浴びるほど飲んでも——多少陽気になる以外——いっさい変化が見えないのだ。

自分が飲まなければ問題なし、と判断し、アマンシールは初っぱなに言われた言葉の意味を尋ねた。

「どういうことなんでしょう？　情けないことに、本当に全然、父たちの言うことがわからないんですが……？」

自分ではこの四年足らずの間に、ずいぶん、政治向きのことを学んできたつもりになっていたのだが、今回のことであからさまに経験不足の弊害が出た。



もしかしたら、こちらの方面に関する才能が、自分には皆無なのではないかと思ってしまうほどだ。

だが、たとえそうだとしても、当事者として巻き込まれてしまった以上、なんとかするしかないのだ。

それでも……いくら必死に考えても、父たちの憂えている事態を想像することもできない己が無能さには泣きたくなったのだけれど。

そんなアマンシールに、ギスカリールは仕方なさそうに肩をすくめて、酒杯を煽りながらこう告げた。

「いいか、問題はふたつある。単純な方から説明しようか……お前、自分が次代候補だって知った時、なにをどう思った？」

改めて尋ねられる意味がわからず、アマンシールは首をかしげた。

「なにって……何かの間違いに違いないって、まず……世界を支え、国の安寧を守護する役目なんか、到底わたしには務まらない、と……」

もしも周囲から、柱神という存在が人間のなかから選ばれ、生まれるのだという知

識を得ていなければ、もっと混乱していたに違いない。

「……ほかには？」

ギスカリールに促され、彼は記憶をたどった。

「柱神さまに選ばれたら、ほとんど歳を取らなくなるっていう話を思い出して、それだとクランさまと、一緒に歳を重ねていけなくて……それはイヤだなぁ……とか」

以前、逆の心配をしていたときには、思いもつかなかった不安を覚えて、ひどく胸が苦しくなった。

なぜなら、以前――ルーシアルの柱神を父に持つクランクレイアが、目の前の青年のように、通常の人間よりゆっくりと長く生きるようになったなら……そう考えたとき、まず脳裏に浮かんだのは、いつまでも若々しい彼女の姿だった。

老いていく自分――いつまでも若々しい彼女。もし万が一、そんなことになったら、あっという間にしわくちゃになった自分が、先に彼女の手を放すことになる……そう思った。

もっとも、そのときは、そんな事態が到来しようものなら、彼女のことを溺愛しま

くっている国王と王太子が、こぞって彼女を引き留め、生涯婚約者のまま終わらされるのではなかろうか――と、被害妄想気味に思っただけのことだったのだが。

けれど、立場が入れ替わってみると……とんでもない痛みの予感に、胸が軋んだ。

もし、自分が次代の柱神に選ばれてしまったとしたら、だ。

成長し、やがては老いていくクランクレイアを見送るのは、自分の方ということになる。

人間であれば、その寿命は誰であれ神の御手に委ねられたものだ――生まれて間もなく命を落とす赤子もいようし、百を超えて生き続ける者もいよう。

だが、柱神とは――紛れもない神の眷族にして、最低二世紀は天と地の間『空』を支える柱として、生き続けるさだめを背負う者なのだ。

そんなものになってしまったら……自分は確実に、愛する肉親や二世を誓った少女を見送ることになってしまう。

(冗談じゃない……!)

そんな未来など願い下げだった。

なのに、アマンシールの答えを聞いたギスカリールは、同情もあらわな目を向け、こう告げてきたのだ。

「お前は、まず間違いなく、次代に選ばれるだろうよ。いっそ、お前がもっと欲まみれの人間だったら、まだ手は残されていたかもしれないのにな……」

どういうことかと問いかけると、ギスカリールは肩をすくめて答えた。

「おれは過去、三度ほど、柱神の選定を身近で見てきたことがある。その三度が三度とも、一番それを望んでないやつが、選ばれたんだ……どうも、権力や不老長寿に欲を覚えるような輩は、資質があっても虹神さまがたのお心にはかなわないようなんだな」

「そんな……」

なりたい者がなればいいのに――とは、アマンシールには言えなかった……言いたかったけれど。

王家に敵対するマルシアス家の候補が選ばれたりしたら、内乱が生じるのは火を見るより明らかだからだ。そんなことになったら、クランクレイアもフィオーンも危険

にさらされることになってしまう。

「……わたしにだって、欲はあります。無欲であることが選定の基準なら、わたしが選ばれるとは限らないじゃありませんか」

そう――自分には、たっぷりしっかり欲があるのだ。

ようやく心の通い合った少女と、手を取り合ってこの先の人生を歩んで行きたい――という最大の望みが。

「……おんなじ望みを、クアンが抱いてなかったと思うのか？」

問い返された瞬間、アマンシールは言葉を失った。

クランクレイアの実父であるクアン・クランドは、突然の帰国命令の意味を知らぬまま、最愛の恋人に約束だけを残してディエーンを後にした。

帰国すると同時に、父親である国王に、ディエーン王妹オルレイジアとの結婚を許してもらう心づもりで……まさか、自らが神の一員に選ばれようなどとは考えもしていなかったに違いなく、そのことを知ったとき、喜んだとも思えない。

けれども、クアン・クランドは選ばれてしまった。そして、ひとから神へと体が作

り替えられる十年もの間、彼は一度も目覚めることなく眠りつづけたのだ……。

と、そこまで考えたとき、アマンシールは自分もまた同じような目にあう可能性があることに気づき、顔色をなくした。

（まさか、わたしも……!?）

クアン・クランドのような例は、極めて珍しいことだとはギスカリールから聞いていた。

ディエーンの当代柱神であるコーランジュは、昏睡状態に陥ることなく変化を遂げたということも。

それでも、可能性は皆無ではない。

なによりの問題は、もしそうなった場合、いつ意識を取り戻すのか、誰にもわからないということだ――ギスカリールから聞いた話では、二十年近く眠りつづけた例もあるということなのだから。

（二十年……）

考えるだけでぞっとする。

そんなにも長い間、クランクレイアを待たせるというのか？　いや、たとえ彼女がそのつもりになってくれたとしても、果たして周囲はそれを許してくれるだろうか？　彼女の母であるオルレイジアが、まさにそのために辛い思いを味わったことを、誰よりも知っている国王と王太子が……。

考えるまでもなかった。

（絶対、無理。あり得ない）

ごくり、と思わず喉を鳴らしたアマンシールに、ギスカリールは溢れんばかりの同情をたたえた目を向けてきた。

「……父御や兄御が言いたくなかった理由がわかったか？」

自分だとて、伝えたくはなかったのだと――顔に書いてあった。

「……はい」

暗い面持ちでうなずいたアマンシールは、なにがなんでも次代に選ばれるわけにはいかないと思った。

国の安寧と、クランクレイアの幸福のために、先日まで信じて疑っていなかった未

来を諦めるつもりは、彼には皆目なかったのだ。

（そうだ。筆頭とは言っても、あくまで候補に違いはないんだし……セディシャ師から、詳しい選定基準とか聞き出して……）

なんとしてもばっくれよう――そう思う時点で、すでに次代柱神候補失格だし……などと考えながら、アマンシールは『脱・次代候補計画』を練り始めた。

後になって、ギスカリールが言っていた『ふたつの理由』のもうひとつを、聞きそびれてしまったことに気がついたが……それはさして問題とはならなかった。

なぜなら、この数日後、アマンシールは身を以て、そのもうひとつの問題に直面することとなったからだ。

それは、柱神に選ばれることの重すぎる意味を、彼の心に刻みつける出来事となった――大きすぎる衝撃と心の痛みを負うことによって。

29

物というものは、意識しないうちにいつの間にか増えているものだな、と寮の部屋を片付けながらアマンシールは思った。

二年に一度の部屋替えの度（たび）、不要品は処分してきたつもりだったが、それでも捨てられない品は格段に増えており、荷造りには苦労させられた。

「たらたらしてんなよー？　明日には家に戻らなきゃならないんだろ？　もうちゃっちゃと振り分けちまえ！　こんな調子じゃいつまでたっても終わらないじゃないか」

アマンシールの突然の退寮宣言に、目を丸くしたものの、先日の試験中にもたらされた知らせ――彼の兄が事故に巻き込まれ、重傷を負ったというものだ――のこともあり、それ関連のことだろうとあたりをつけているらしい、入学以来の友人であるハ

ーリクは、率先して彼の荷物まとめを手伝ってくれていた。
「あー、これは不要、これも要らない、これもこれもこれも……」
……もっとも、彼の判断基準は、あくまで彼自身の認識と欲を孕んだものであったため、アマンシールも安心して任せられない部分があったのだが。
「ちょっと、待って！　なに、勝手に講義の帳面不要品に振り分けた挙げ句、懐にしまいこんでるんだよ!?」
悪戯を見とがめられた子供のような笑顔で、ハーリクが「やー、だって」と言い訳してくる。
「お前、サイアル教授の物理、復習なしでも最高評価受けてたじゃないか。来期はもう受けないんだし、必要ないだろう？」
もっともらしい理由を挙げる友人に、しかしアマンシールは冷ややかな視線を向けた。
「……売る気だな？」
サイアル教授の物理の授業内容とその試験は、難しいことでつとに有名だった。

しかし、難関突破の暁に与えられる高い評価もまた有名で、過去教授から『優』を勝ち取った学生の帳面は、密かに高額で売買されてきたとかなんとか……。

アマンシールもまた、そのひとりであったから、すぐにぴんときた。

実際、ハーリクはこれまでにも似たようなことを何度かしてくれたのだ——気づかないほうがおかしい。

しかし、アマンシールのこの問いに、赤味を帯びた髪の友人は、大まじめにかぶりを振った。

「売るわけないだろ、こんな判読不可能な暗号文書」

あからさまに悪筆を揶揄され、ぐっと詰まる。

試験のときには、さすがに丁寧に綴るよう心がけているため、「読めないこともない」ということで、正当な成績評価をもらっているわけだが、講義中の帳面の内容は……確かに『ミミズののたくり状態』暗号文字の羅列と捉えられても仕方ない代物だった。

入学当初は、彼の悪筆ぶりを知らない教師が、真面目に取っていた帳面を指して

「なにを落書きして遊んでるんだ！」と叱責したことも……ふたりや三人や四人ではなかった。

そのことを思えば、ハーリクの主張はいちいちもっともだったのだが、アマンシールは別のことも知っていたから、そこで引き下がったりはしなかった。

そう、ハーリクはアマンシールの悪筆を判読できる特殊能力の持ち主なのだ。

「直接は売らなくても、『翻訳』して流通させるつもりなんだろ？」

「いいじゃん、そんくらい。洩れなくお前の日常生活のボケやらなんやら聞けるってんで、お前の講義帳面の複製、超人気なんだぜ？　なかでも受けてるのが、お前が講義の最中に描いてるパラパラ漫画で、あればっかりは複製に苦労させられるんだけど……不思議だよなー。あんだけ悪筆のくせに、絵だけは上手いんだから」

「そんなしょうもない、ひとの恥、下級生に広めるんじゃない！」

そこでこぶしを振り上げたとしても、誰もアマンシールを責めることはなかったろう。

しかし、ハーリクの主張はひと味違った。

「お、おれはっっ！　お前の、他人にはわかりにくい可愛げとか親しみやすさとかを、広く布教してやってるだけだ！」

「そういうことは、完全無償でやってから言えーっっ！」

「完全無償だなんて……そんな真似したら、銅版の技術者たちに、仕事頼めなくなるじゃないか！」

叫んでしまってから、慌ててハーリクは口を手でおさえた……が、もう遅い。

「ふぅーん？　同じ講義取ってなくても、後輩が困ってるから、とか、友達が危ないからとか言って、何度も何度も何度も、講義の帳面貸したことあったけど……そういう利用法に用いてたってわけか」

皮肉もあらわに、当てこするように告げたアマンシールに、ハーリクはしかし、恥じ入る様子もなくこう答えたのだ。

「前払いだ！」

と――。

「はあ？」

意味がわからず、首を傾げてしまったアマンシールに、ハーリクはなぜか偉そうに胸をはってこう続けたのだ。

「この先、お前には絶対、絶対山ほど面倒かけられるに違いないんだから、少しでもお前の罪悪感を減らすために、少しばかり懐を潤わせてもらっただけだ。お前だって、心苦しく思うよりは、そんだけの恩は売っといたって感じられるほうがいいだろう？」

まったくと言っていいほど根拠のない未来予想図を、しかしハーリクは自信たっぷりに言い切った。

「お前に予知能力があるとは知らなかったな」

皮肉たっぷりに告げたアマンシールに、しかし親友は動じなかった。

「おうよ。お前の帳面さえあれば、おれは無敵の予言者だぜ。お前が印を付けてるところ、まず間違いなく試験に出るもんなー」

「全っ然、予知能力でも予言でもないじゃないかぁぁっっ！　あ、言ってるそばから、またなに着服してるんだ！　返せったら！」

「講義の内容、書き留めた時点で頭に完璧に入れてるやつに、こんなの必要ないだろう!?　ここは大きな心で、情報提供するのが、持つ者の務めってもんだろうが！」

「アンチョコ頼みじゃ、身に付くもんも身に付かないだろうが！　第一、おれは学院をやめるわけじゃないんだからな！」

言い切った後、アマンシールは一瞬、本当にそうだろうか、と思った。

父と兄たちの命令では、しばらく自宅に戻り、外出を控えるように、ということだったが、その期限については聞いてはいない。

恐らく、次代柱神の選定が一段落つくまでのことだとは思うのだが……それがどれくらいの時間を要するものなのかはわかっていないのだ。

幸い、病気らしい病気もしたことのない彼は、このまま後期試験まで出席せずとも、ぎりぎり日数は足りるのだが、試験にまで出られないとなると卒業できなくなってしまう。

そんなことにならない内に、なんとか平穏な日々を取り戻したい——と、思っていたときのこと。

「……あの……」

部屋の扉の方から、遠慮がちな声が聞こえた。

立っていたのは、見覚えのない、下級生らしい少年だった。

面識のない相手が訪ねてくる頻度にかけては、学院内でも例を見ないハーリクが目当てに違いないと思い、アマンシールは小さく友人を小突いた。

「おい」

「あ、うん……」

うなずいたハーリクは、途端に愛想のいい笑みを顔に貼り付けた——他人に警戒心を抱かせない、見事な営業用笑顔である。

しかし、このときばかりは、アマンシールの判断は間違っていた。

少年は、おどおどした様子で「あの……いえ、ファラスース先輩に手紙を届けるよう、言いつ……いえ、頼まれたものですから」と言ったのだ。

「手紙って？」

問いかけると、待っていたかのように少年は懐から封筒を取り出し、彼に押しつけ

るように渡すと同時に脱兎のごとく逃げ出した。

ちょっと、情けなく思ったアマンシールだった。

「なあ、おれって、下級生にあんなに怯えられるようなこと、した？」

問われた親友は、ひょいと肩を竦めてこう答えた。

「噂ならではの尾びれ背びれだろー？　お前がノーシャンをへこませた一件のことが、一部で大きく取りざたされてたみたいだし……笑えるったらないぜー？　よほどの実害がない限り、指一本動かそうともしない横着者のお前がさー、よりにもよって、狙った標的をいたぶり倒すためなら、手間暇を惜しまない、嫌がらせ大好き人間ってことになってんだもんなー。で、手紙にはなんて書いてあるんだ？」

「見るなって」

無遠慮に、横から覗き込もうとする親友を退けて、開封したアマンシールは、文面を目にした瞬間、凍り付いた。

書かれていた内容は簡潔だった。

『お前の秘密を知っている』

意味を悟ると同時に、アマンシールは、便せんをぐしゃりと握り潰していた……。

呼び出された場所は、学院の寮の裏庭だった。

差出人の名も記されていない手紙――応じる必要などないと、思わないでもなかったが、それでも捨て置くことができなかった理由はただひとつ。

『お前の秘密を知っている』

無視しがたい重みを宿した一言だった。

アマンシールがファラスース家の嫡出子であることは、もはや学院内では秘密でもなんでもない。

だが、秘していることは、ほかにもあるのだ。

それらの悉くは、今の時点では公にする……されるわけにはいかないことばかりで、だからアマンシールは卑怯な呼び出しにも応じざるを得なかったのだ。

もしかしたら、こちらが隠す必要性を覚えていない一件に関することかもしれないが……そうだった場合は、せいぜい神妙に、それこそ重大事だと相手に思わせて交渉するしかないだろう。

……うまくいくかどうかは、それこそ、神のみぞ知る、だが。

「やはり、来たな」

木陰から現れた人物の顔を見た途端、アマンシールは（そう言えば、こいつがいたんだ）と、妙な感慨を覚えた。

入学以来、やたらと自分やハーリクのことを目の敵にしてくれた、けれど度の過ぎる嫌がらせに、ささやかな反撃を試したところ、思った以上の成果を得た結果、以来ほとんど関わり合うことがなくなった同級生の姿が、そこにはあった。

（ノーシャン……）

入学以来、保ちつづけている高席次は相変わらずだが、布団のなかに虫を放り込まれた際の彼の動転ぶりが広く知られて以来、彼は派閥と呼べる勢力を失っていた。

おかげで自分やハーリクを含む、彼から目の敵にされていた面子の学院生活が、格

段に快適なものになったことを思えば、間違っても過去を悔やむつもりにはなれないが……逆の立場である彼にとっては、恨み骨髄ものだろうことぐらいの想像はつく。

（まずったー。相手がこいつだってわかってたら、頭から無視したのに）

そのせいで、たとえどんな風評が学院内に流れようと、一度失墜した人望を――確かに、その原因は子供っぽい価値基準によるものだったのだが――五年以上かけても尚、回復できずにいる彼の言葉に、耳を傾ける者の数は多くない。

国内有数の富豪の御曹司である彼は、自らの行為を振り返り、反省するのではなく、他者に責任を押しつけることを選んだからだ。

つまりは、アマンシールとハーリクが全部悪い、と。

実害がなくなった時点で、自分たちは気にすることをやめたのだが、ノーシャンはそうではなかったらしい。

そして、この場にアマンシールが来たことで、彼はなにかしらの昏い悦びを見いだしたようだった。

「やっぱりだ！」

勝ち誇ったかのように、ノーシャンが叫んだ。
思わず正気を疑わずにはいられないほどの、甲高い声だった。
「やっぱり、侯爵家の力を利用したんだ！　そうだよ……そうでなくっちゃ、ぼくがこんな酷い目にあうはずがないんだ……この、卑怯者！」
そう叫ぶなり、ノーシャンが取り出したものの鋭い輝きの正体を、アマンシールはすぐに理解することはできなかった。
なぜなら、それは、厳しく院内への持ち込みを禁じられたものだったからだ。
それは、鋼の――刃の輝き。
「お前なんかが来たりしたから、ぼくの予定は全部おかしくなってしまったんだ！　僕は最優秀で、将来役に立ちそうな人脈まるごと持って、官吏試験に臨むはずだったのに……お前の、せいで！」
それは、完全に言いがかりだった。
うまくいかなかった原因を、ただ個人的恨みから、アマンシールに求め、その鬱屈を晴らしたいと思っているだけのことだった。

だが……だからこそ危険な局面でもあった。
ひたすらに、八つ当たりだけを目的とした人間は、どんな行動に出るかわからないのだ。
殊に、刃物を手にした者は――。
「……よせよ……そんな、物騒なもの、持ち出すな」
必死に、懸命に、アマンシールはノーシャンを落ち着かせようとした。
恐怖からの言葉ではあったけれど、その意味は、恐らくノーシャンが考えるそれとは大きく違ったものだった。
「頼む、から……っっっ！」
叫んだ彼に、ノーシャンは嘲りの声で応じた。
「お前なんか、王立学院に来たことを、死ぬほど後悔すればいいんだ！」
叫んで、彼は刃の切っ先を、アマンシールに向けて突進してきた。
（駄目だ！　このままじゃ……！）
そう、思った次の瞬間のこと――。

ノーシャンと自分との間に入り込んできたそのひとと、その体温と、その命を……感じた。

その人の姿の意外さに、最初は信じられず、アマンシールは恐る恐るそのひとの名を口にした。

「……ハーリク……？」

その呼び声が絶叫に変わるのに、いくらも時間はかからなかった。

腕をかすっただけの傷を負ったかに見えた友人の顔色が、見る間に青ざめ、その体から力が抜けていくさまを目の当たりにしたアマンシールは、喉も裂けんばかりにその名を呼びつづけた。

「ハーリク！　ハーリク！　ハーリクっっ！」

と――。

30

「知らない！」
と、ノーシャンは叫んだ。
どうして、こんなことになったのか、彼にはわからなかった。
王立学院に、最優秀の成績で入学を決めたとき、自分の未来は輝いていると信じて疑わなかった。
貴族でこそなかったが、彼の生家はディエーンでも有数の豪商であり、その後ろ盾と自らの頭脳がある限り、栄光に満ちた将来が待っているに違いないと思っていたのだ。
（常に首席を守り、役に立ちそうな面子は味方にして……）

有効な人脈を手に、官吏の世界に足を踏み入れるのは、当時、すでに彼のなかでは確定事項だった。

当然、その障害となりそうな存在を排除するつもりも満々だった。

入学して間もなくのころ、講義のための移動中、持っていた荷物を取り落とし、学院の廊下に散らかすという粗忽者を偶然見かけた。

入学早々に実施された実力試験での成績優秀者の名前と顔は、すでに記憶していたから、そこに入っていなかった、その『粗忽者』のことなど、最初は気にもとめなかった。

しかし、偶然足下に転がってきた、その少年のペンを目にした途端、目を疑った。黒地に金の象眼を施された持ち手の先についていたペン先は、かなり純度の高い金。

手広く商売をやっている家業もあって、ノーシャンはそれがとんでもない高級品であることを見抜いた。

自分でも持っていないような品を持っている、その少年が何者なのか、まず気にな

った。

入学早々、すでに人脈を作りかけていたノーシャンにとって、相手の素性を調べるのはさして難しいことではなかった。

友人と言う名の手下からの報告で、その少年が、地方出身の田舎者であることがわかった。

なるほど、と彼は思った。

地方の豪族は、価値もわからぬくせに、高価な品を持ちたがるものだと、以前父が呆れたように話していたことを覚えていたからだ。

（豚に真珠ってやつか）

そう切り捨て、忘れようと思っていたのに……忌々しいその少年は、すっきりとノーシャンの視界から退場してくれなかった。

いつの間にか、そいつの隣に、昔からいけ好かないと思っていた同級生の姿を見かけるようになって、ますます無視しがたくなった。

しかも、成績評価には直接作用しない小試験とは言え、自分を抜いて最高点をあげ

たあたりから、彼に対する不快感は大きくなっていった。

それでも、ノーシャンはそのころは、まだ余裕をもっていられたのだ。

王家の第二王子ケルティスとの誼を誇っていたころには――。

それを見せつける意味も兼ねて、王子を寮に招待したのが……最悪の結果を引き出してしまった。

よりにもよって、自分の一番の後ろ盾にと望んだ王子は、問題の少年を見るなり、とんでもない爆弾発言をしてくれたのだ。

『ああ、わかった！　お前だろう、周囲の反対を押し切って、王立学院なんかに入学しようだなんて酔狂起こした変わり種のファラースの子供は！』

その瞬間、ノーシャンにとって、件の少年は、潰さなければならない、憎むべき標的に変わった。

アマンシールがなにを望んで、わざわざ王立学院への進学を望んだのか、彼が真実求めているものは何なのか――そんなことは、なんの意味も持たなかった。

王家に連なる名門侯爵家の、第三子とはいえ、嫡出子――。

そんな相手が同期にいては、自分が飲み込まれてしまう。
だから、徹底的に排除すべく動いたのだ。なにがあろうと叩きつぶして学院から追い出すつもりだった。
育ちのいいボンボンなら、すぐに音を上げて逃げ出すに決まっていると、当時もまだ事態を甘く見ていたかもしれない。
ややあって、意外と根性があることを知ったけれど。
思い通りにならない事態というものに、ノーシャンはあまり慣れていなかった。
さらには、こちらから攻撃を加えた相手が、反撃してくるという可能性など、彼は考えたこともなかったのだ。
それまで彼が踏みつぶしてきた相手は、皆、悉く彼の持つ背景に抗しようのない者たちばかりだったのだから。
だから――。
ほとんど生まれて初めて味わった、反撃は衝撃的だった。
寝具に足を突っ込んだ瞬間、素肌に触れたおぞましい感触を、ノーシャンは生涯忘

れられないと思った。

慌てて掛け布団を引きはがした時、目にした大量の虫、虫、虫！

その、衝撃ときたら、とても言葉で言い表せるものではなかった。

見栄もプライドもなく、絶叫してしまったあの衝動。

その後の、格下だと見なしていたはずの、同級生たちのあからさまな嘲り——。

あの、たった一件で、ノーシャンは面目を失い、築きかけていた全てを失った。

（許さない、許さない、許さない！）

憎悪と恨みは心に積もり、晴らすためなら、なんでもする心積もりになっていた。

そんな時に、聞いた。

ノーシャンが恨んでも恨み尽くせぬ相手——アマンシールが、家庭の事情で寮を出、学院の方もしばらく休学するらしい、という情報を。

報復するなら、今しかない、と思った。

自分がアマンシールのために味わった敗北感や痛みを、その本人に思い知らせる機会はいましかない、と。

折も折、同じことをささやいてきた、卒業生がいた。
ファラスース家との縁故を求め、しばらくアマンシールにつきまとったものの、一顧だにされず、結局望む部署への就職がかなわなかった男だった。
『お前があいつに、含むところありありなのは知ってるんだ。なに、そんなに警戒することたーない。ちょっと手伝ってやろうってだけなんだからな』
そう言って、男は小瓶を差し出した。
『痺れ薬だ。針でも小刀でも、刺してすぐに、動けなくなる。そうなったら、もうこっちのもんだ。好き放題鬱憤を晴らせるってもんだ』
それが、いかに卑怯な行為であるのか、ノーシャンもわかっていた。
身動きできなくなった相手に、殴る蹴るの暴行を加えるなど、卑怯者以外の何者でもないことはわかっていた。
それでも――。
ノーシャンは、差し出された小瓶に、手を伸ばさずにはいられなかったのだ。
傷ついた誇りと自信は、自分だけの手でなんとかすることなど、到底出来なくて

――元凶を痛めつけることで、取り戻せるなにかがあるのだと、信じたくて。

けれど、こんな現実が待っているなどとは想像もしていなかった。

「知らない、知らない、知らない！　毒なんか知らない！　し、痺れ薬だって言われたんだからぁぁ！」

衝立の裏で、そっと息をつく大人がふたり――。

ファラスース家の長男と次男は、目線を交わすなり、こう言い合った。

「単なる駒だな」

「ええ、常套手段ですね」

そうしてふたり、殆ど同時に息をついた。

ノーシャンという少年が、彼らの末弟に対する遺恨をいいことに、利用されたことは明白だった。

事実、事件の現場に残されていた短刀の刃に塗られていた毒物は、いかに彼が豪商の息子であっても、たやすく手に入れることなどできない代物だった。

傷口どころか、肌に触れただけでも危険なその毒物は、南方の密林に生息するある

種の虫が、外敵を巣に近づけさせないために排出する体液を、高濃度に精製したものだったのだ。

少年を利用した人物――恐らく、彼を唆した学院卒業生も含め、何人もの人間が介在していたのだろうが――は、間違いなくアマンシールを確実に殺そうとしていた。

それほどに金と手間をかけた殺意を、ファラスース家の末弟が向けられる理由は、ひとつしか考えられない。

そのときが来るまで、完全に秘されるはずの『次代柱神』の候補のひとりに、彼が挙げられたということしか。

ファバルワースが、複雑そうに眉宇をひそめた。

「うちだって、人脈駆使して、全員とはいかないまでも、何人かの候補を知っちゃいましたからね……余所の家が、同じことしてもおかしくはないんですよね……問題なのは、相手が対立候補をひとりでも減らそうというつもりで仕掛けてきたのか、それともうちのが筆頭候補にあげられたことを知って、なにがなんでもってつもりで仕掛けてきたのか……ですが」

チェルギースも深刻な顔でうなずいた。

「そうだな。随分手間暇かけてはいるが、次代の候補者抹殺というのなら、おかしくはない水準の策だ。それだけに……」

見極めが、難しい。

単なる候補のひとりとして、アマンシールを狙ったというのなら、神殿内部における情報提供者の数は、結構多く、絞るのは難しい。

だが、狙う相手が筆頭候補だと知る人物となると……神殿でも数が限られる。そう、選定者セディシャ教授を含めても、八人程度には。

それは、選定者と虹神神殿各最高司祭による情報漏洩を意味する。

神殿上層部の誰かによるものか、限られた最高位にある何者かによるものか——その差は大きい。

そして、もし後者であった場合、疑うべき存在が、さらにひとつ増えることになる。

「そんなことにだけは、なってほしくないんだが……」

沈痛な面持ちで、つぶやく長兄に、まったくだと言わんばかりの顔で、ファバルワースもうなずいた。
「同感です」
嵐の到来を予感……否、確信し、ふたりの表情は緊張に引き締まっていた。

こんなことになるだなんて、まったくなにひとつ、想像すらしていなかった。
それこそが、自分の自覚の足りなさであったことを、アマンシールは痛感していた。
ロスタロイドにおける、ファラスースの屋敷――その一室で、彼は苦しみ続ける親友の手を握りしめていた。
下級生に言伝られた呼び出しに応じたことを、彼は心の底から悔いていた。
これまでも、何度か似たようなことがあったが、それがいずれも大事にいたらなか

ったこともあって、警戒心が薄れていた。

なにしろ、ハーリクの院内小遣い稼ぎの商売活動の一環で、いつのまにか――全然ガラではないのに――『名門貴族出身であるにも拘わらず、逆風吹く環境をものともせず、しっかりと足場を築き、成果も上げた英雄』扱いされてしまったせいで、一方的に慕われたあげく、「勇気を下さい」だの「心の支えにしますから、握手してください」だの、なにを考えてるんだ一体!?　……と思うような呼び出しが、珍しいと思うこともない頻度であったせいもある。

それでも、相手がノーシャンであると知った時点で、さっさと踵を返していれば、こんなことにはならなかったのだ。

明らかに、形相の変わっていたノーシャン……。

危険だと、確かに感じていたというのに……なにをしでかすかわからない不安ゆえに、彼に背中を見せてでも立ち去らなかったツケが、思いもかけない形で回ってきた。

（さっさと逃げればよかったんだ……）

たとえ、その行為ゆえに、背後から卑怯者、臆病者と誹られることになろうとも。
つきあったがゆえに……対峙する時間を保ったがゆえに、ノーシャンは己が感情を爆発させたのだ。
そうして、ノーシャンが引き抜いた短刀――。
あれを出させたのは、間違いなく自分の存在だった。
刺されたのが自分であったなら、それは自業自得で終わったのに――。
「ハーリク……お願いだから、目覚めて……ハーリク」
刃に塗られていた毒のせいで、未だ昏睡から醒めない親友の、冷たいままの手を握りしめ、アマンシールはただ呼びかけることしかできないでいた。
「ハーリク……ハーリク……！」
こんなことになるだなんて、思ってもみなかった。
自分が、次代柱神の筆頭候補に選ばれたことの意味など、本当に、なにもわかってはいなかったのだ。
父や兄たちは知っていた。

だから、早急に自分のことを屋敷に隔離しようとしていたのだ。
だのに、自分だけがその現実に気づかずに……当然持つべき警戒心すら持たぬまま、日常の延長のことだと、のこのこと死の刃の前に姿を晒した。
そんなつもりはなかった——などという言葉は無意味だ。
こちらがどんな心づもりであろうとも、この命を刈る意志を持つ何者かは確かに実在するのだから。
その自分の不覚悟が、大切な親友を巻き込んでしまったのだ。
「ハーリク……！」
解毒の処方を施されたものの、いまだ生死の境をさまよう友人の手を、アマンシールはぎゅっと握りしめた。
運を天にまかせるしかない状況だ、と、医師は告げた。
だからこそ、力一杯両手に力をこめ、その手を握り返すことしかできないのだけれど。
奇跡のような一瞬に、アマンシールは神の存在を信じた。

「ああ!?　なに、死にそうな顔してるんだ？」

ゆっくりと目を開けた親友は、自分が置かれていた状況もなにも放り出して——わかっていないだけかも知れないが——アマンシールの頭をわしゃわしゃとかき乱してくれた。

「……馬鹿、お前。死にかけてたのはお前の方だったんだってば……」

乱された髪以上にぐしゃぐしゃに泣き崩れた顔で、アマンシールは猛毒の害から生還した友人を抱きしめた。

これ以上はないという、神への感謝の念とともに——。

31

アマンシールから届けられた手紙には、しばらく王宮に顔を出せない旨が認められていた。

そのことに対する丁寧な謝罪と、会えないことを残念に思う言葉が、これでもかというほど綴られた便せんを、何度も何度も読み返した後、クランクレイアはぱあっと放り出した。

「クランさまっっ！」

侍女頭である女性が非難の声を上げたが、彼女はぷい、と顔を背けた。

「誠意が感じられない！」

ぷんぷんと、彼女は腹を立てていた。

互いの心が通じ合って、半年と少し――可能な限り会いたいと、一緒にいたいと思うのは、自分ひとりなのかと考えると、悔しくて仕方なくなる。

晩秋の水に入り、月の葉を探してくれたアマンシールの心を疑うつもりはないけれど、秋には婚約を発表する自分に対して、この手紙はないと思うのだ。

なんだか、自分ばかりが彼のことを想っているような気がして、それも癇に障る。

「誠意、ですか？」

呆れたようにつぶやきながら、ライラーナが床に散らばった便せんを拾い集める。

「わたくしの目には、充分誠意に満ちたお手紙に見えますけれど……？」

「どこが!?」

食ってかかったクランクレイアに、そろそろ三十路にさしかかろうという――落ち着いた雰囲気を除けば、とてもそうは見えないのだが――女性は、ふわりと目元を和ませ、告げた。

「あの悪筆な方が、ここまで丁寧に文字を綴られるのに、どれほど時間をおかけになったことか……しかも、修正の跡がいっさいありませんわ。きっと、書き損じた時点

で、新しい便せんに、はじめから書き直されたのでしょうね」

それだけとっても、どれだけの手間と時間がかかったことか——指摘されてみると、確かにそれはその通りだった。

アマンシールの悪筆ぶりは、尋常ではないのだ。

慣れと必要性から、かなり解読できるようにはなったのだが、未だに読めないこともある——彼の文字を読み解こうとする時、感じるのは未知の外国語の翻訳に挑戦している気分なのだから、そのほどが知れるというものだ。

しかし、むかつきは治まらない。

「それでもっっ！　しばらく会いに来られないというのなら、その理由ぐらい書いて然るべきじゃないか！　なのに、そのことには一言も触れずに……理由を言ってくれたら、わたしだって納得できるかもしれないのに……」

「お家の事情だと、書いてらっしゃるではありませんか」

宥めるようなライラーナの口調に、わかっていることを繰り返される苛立ちを覚える。

「だから、その事情とやらを、詳しくは無理でも、多少なりとも説明してくれてたらと――」

言いつのるクランクレイアに、ふっとライラーナが厳しい声で呼びかけた。

「クランさま。無理をおっしゃるものではございません。あの方の御生家が、ディエーンでも屈指の名門であることをお忘れですか？　ファラスース家ほどの大家ともなれば、公にできない事情を抱えこむこともございましょう。何らかの異変が生じたと、余所に知られるだけで騒ぎになることだとて考えられるのです。ご自分ひとりの問題ではないからこそ、侯子殿はこのように記しておいでなのではありませんか？察してさしあげなくては」

「それは……」

本当は、ライラーナに言われるまでもなくわかってはいるのだけれど。

ファラスース家は、ただの名門貴族――ディエーンの始祖の血を誇るしか能のない、由緒正しさにしか矜持を持てぬ、数ある『名ばかりの大家』ではない。

優れた外交能力を発揮し、隣接する諸外国との折衝の大部分を務め、さらには貿易

業を中心に展開した商業においては、遠方地との取り引きを次々と成功させ、物ばかりでなく、人材や文化の流通まで活性化させた立役者と言われている。

王家が政治に専念できるのも、ファラスース家あってのことだ——という話を小耳に挟んだのはいつのことだったか。

ファラスース家は、ディエーンの第二の王家である——とまで、言う者もいる。

それでもファラスース家が、南方の大家マルシアス一族のように、王家に危険視されずにいるのは、現当主リュシアンドが国王エスライドの又従兄弟であり、また絶対の忠誠心を——どんな粗探しの名人でも見つけられないほどのもの——を王家に捧げているからだった。

ファラスース家は、王家にとって、失うことの出来ぬ唯一無二の懐刀なのだ。

だが、その座を虎視眈々と狙っている者は、数え切れないほどにいる。

隙あらばと窺っている者たちに、決して弱みを見せられないという枷を、かの家はかけられている。

いかに家業に関心がなく、また三男であるがゆえにそれを許された身とは言え、ア

マンシールも完全に家から自由ではないのだろう。

わかっている。

本当に、そのぐらいのことはわかっているのだ。

だからこそ、内々で癇癪を起こすぐらいで我慢しているのだ、クランクレイアは。

けれど——ここ最近になってから、不意に襲われるようになった不安は一体なんなのか。

それは、あくまでも漠然としたものでしかない。

けれど、決して消えることなく、小さなしこりとなって、彼女の胸を騒がせる。

こんなときだからこそ、アマンシールに相談したい。一緒にいてほしい。

そう思うのに、届けられた手紙には、「当分会えそうにない」との言葉。

(なにかが……動き始めている……?)

何となく、そのことだけは感じ取れるのに、具体的なことはなにもわからない。

以前なら、こうした曖昧模糊とした不安や疑問は、当代さま——コーランジュの屋敷を訪れれば解消された。

けれど、いまはそれもかなわない。
ある時期を境に、精霊たちは、コーランジュの屋敷に至る道を……それまで、クランクレイアに対しては、無条件に解放していたその道を、閉ざしてしまったのだから。
形の見えない不安だけが、胸に降り積もる。
（どんなに誠意が溢れてたって、手紙なんかいらない……）
欲しいのは、目にしたいのは、触れて確かめたいのは——アマンシール自身だ。
そのしっかりとした存在だけを確かめたい。
（だのに……）
彼は、来られない。
その知らせ一つで、なぜこんなにも胸が重くなってしまうのか——。
それこそ、癇癪でも起こさなくてはやっていられない。八つ当たりでもなんでも、取りあえず気さえ晴れれば、得体の知れぬ重石に、心が潰されることはないのだから。

そんなことを思っていたクランクレイアは、あり得ない方角から、近づいてくる気配を感じ取り、はっと息を飲んだ。

それは、精霊たちの張った結界の向こうから、やってきたひと、だった。

（当代さま……わたしには、最近会っても下さらなかったのに……）

それどころか、屋敷の敷地に踏みいることさえ許されなかったというのに――。

その『中』から、出てきたひとがいる。

そして、そのひとは、真っ直ぐにこちらに歩いてくるのだ。

「……誰？」

と、掠れる声で、クランクレイアは問いかけた。

答える声は、なかった。

そのときは、まだ――。

「やあ」

不審者として、警備の兵士を呼ばれてもおかしくない場面で、庭の奥から現れた青年は、にこやかに手を挙げた。

会ったのは一度きり――けれど、ディエーンの民とは特徴の違いすぎる外見のその青年のことを、クランクレイアは忘れてはいなかった。

ほかでもない、彼女の実の父親であるというひとのそばにいた、そのひとのことを忘れられるはずがない。

「ギスカリール……さま？」

淡い金髪の青年は、満面の笑顔で「ああ、覚えて貰えてたんだ、よかった」と返してきた。

そして、クランクレイアがコーランジュの様子を尋ねるより先に、こう言い放った。

「今日は、ちょっとね……君と話がしたくって……」

「話……？」

首を傾げたクランクレイアに、さりげなく寄り添ったライラーナが問いかけてきた。

「クランさま、この方は？」

（ああ、そう言えば、あの豊穣祭のとき、ライラーナはそばにいなかったんだわ……）

それでは、彼女が警戒するのも無理はない。

クランクレイアはなるべく穏やかな口調で、ギスカリールが自分にとって実父に当たる、ルーシアルの当代柱神クアン・クランドの友人であり、彼自身、他国の柱神さまの縁者であることを説明した。

「さようでございますか」

うなずいたライラーナから、目に見えない警戒の棘が抜け落ちていくのを確認したかのように、ギスカリールが近づいてきた。

「良かったら、お茶を貰えるかな？」

こちらを信用すると宣言するも同然の言葉を口にした相手に、答える言葉はひとつ

しかなかった。

「はい、もちろん。……あのぉ、失礼ですが、お好みの銘柄を教えていただけたらと思うのですが……」

「お茶なら、なんでも好きだから大丈夫。だけど、そうだな……生の香草があるみたいだから、それを使ったお茶を淹れてもらおうかな。乾燥物じゃ、絶対出せない風味が味わえるから」

「かしこまりました」

と、応じたのはライラーナ。

彼女の淹れる香草茶を待ちながら、クランクレイアは目の前の青年をじっと見つめた。

人生経験もなにもかもが乏しい自分が、神と呼ばれる存在の縁者のなにもかもを見抜けようはずがない。

それでも、たったひとつでも、読み取れるものがないものか——彼女は必死に探そうとした。

……成果は、ないに等しかったけれど。

十四歳のクランクレイアにとって、数年どころか十数年、歳を取っていない男の相手は、荷が勝ちすぎた。

（あ、だめ……負け）

なにかされたわけでも、言われたわけでもないのに、クランクレイアが自ずと敗北を悟ったその時、見計らったかのように、ギスカリールが口を開いた。

「きみが、なにを幸せに思うかについて……少々話を聞いておきたくてね。だから、わたしが来たんだよ」

なにを言われているのか、クランクレイアにはわからなかった。

けれど、笑みをたたえたギスカリールの瞳の奥底に、厳しい光が宿っていることに気づき、彼女は背筋をのばした。

彼が、嵐を背負ってきたことを、直感的に、彼女は悟ったのだ。

ずっと側にいて、クランクレイアを守り、仕えてきたライラーナの目には、主の緊張は明白だったのだろう……ギスカリールとクランクレイアのふたりに、茶を淹れた後、こう申し出てきた。

「それでは、わたくしは外させていただきます」

ギスカリールはなにも言わなかった。

ひとりきりで、目の前の青年と対峙するのかと思うと、急に心細さを覚えたクランクレイアだったが、引き留めることはできなかった。

もしも、自分の直感が正しければ、これから彼が告げる内容は、とてつもなく重い意味を持つものに違いないからだ。

だからこそ、一緒にいて欲しい――と、思わなかったと言えば嘘になるが、それは同時にライラーナにも重荷を背負わせることになる。話を聞いた後、自分ひとりでは対処できないと判断した上で、誰かに相談をもちかけるのなら、それは自分自身の責任だと言い切れる。

けれど、不安だからという理由だけで、ライラーナの同席を望むのは、ただの甘えだ——そんな甘い思いで、大切な女性を巻き込んでいいはずがない。

不安であることに変わりはなかったが、胸中、小さく息をついて、彼女はうなずいた。

「そうして——」

ライラーナの眼差しは、けれどなにかあれば、すぐに呼ぶように伝えてきていた。

本当にありがたいと思いながら、「わかった」と目線で告げて、彼女はギスカリールに相対した。

ライラーナが優雅な足取りで、声を拾えぬほどの場所まで離れたのを確認してから、クランクレイアは他国の柱神の縁者を、真っ直ぐに見つめた。

「それで、お話とは、いったいどのようなものでございましょう？」

緊張していた。

それと同時に、これで胸に広がる得体の知れぬ不安の正体が知れるかもしれないという期待も湧き出ていた。

なにもわからないままでは、本当に、なにも出来ない。
そんな決意をあらわにした彼女の顔を見て、ギスカリールは満足そうに笑って告げた。
「うん、いい顔だ。覚悟をしっかりと決めた、本当にいい顔だ……そんな顔ができる君になら、問いかけることができる」
やはり、試されていたのだ――という思いと、その上で告げられる内容とは、いったいどのようなものなのかという不安と緊張が、全身に走った。
「……ギスカリールさま……？」
尋ねた彼女に、淡い金髪の青年は、「念のために言って置きたいのだけれど、ここでの話は他言無用に願えるかな？」と問い返してきた。
これには、即答できなかった。
「信頼できると、わたしが思うひとたちにも、黙っていろということですか？」
「う、ん。この場合は、そうして貰えたほうが望ましいと思うのでね」
無理そうなら、そう言って貰ってもかまわない――無造作に、ギスカリールはそう

告げた。

その場合、語るつもりであった話をすべて胸の内に秘め、席を立つつもりなのだとクランクレイアにはわかった。

ここまで思わせぶりな話題を振っておきながら……しかも、自分が経験に乏しい子供にすぎないこともわかっておりながら……ほとんど無理難題としか言えない要求をつきつけてくる青年を、思わず彼女はきつく睨み付けた。

「……理由をお聞かせください。納得できるだけのものを認められましたら、覚悟を決めるかどうかの判断基準にできると思いますから」

できるかもしれませんから——とは、言わなかった。

そんな逃げ口上を許してくれる相手だとは思えなかったから。

けれど、材料もなにもなしに、即決しろという乱暴な申し出にも、答えるつもりはなかった。

だから、それはぎりぎりの譲歩案だった。

ひた、と正面から青年の顔を見つめ、望みをつきつけたクランクレイアのことを、

青年もじっと見つめていた。
見極めをつけられようとしている――クランクレイアはそう感じた。
そして――。
はたしてどれほどの時間、ただ視線をぶつけ合うという対決をつづけていたのか――。
勝敗を感じさせることのない、さりげない仕種で、ギスカリールが視線を空に移した。
勝った――のではない。
恐らく、最低限の資質を、認めてくれただけなのだ。
それでも、全身から力が抜けてしまいそうな疲労感を覚えた。
そんな彼女に、ギスカリールはとんでもない爆弾発言を投げかけてくれた。
気の休まる暇もないとは、まさにこのことだった。
「当代さまの時間は残り少なく、すでに次代の選定が始まっているんだよ」
告げられた言葉の、あまりの重さに、クランクレイアは声を上げることさえできな

かった。

さらに追い打ちをかけるように、ギスカリールの声が、鞭のようにクランクレイアの耳を打った。

「アマンシールは……ガジェストリオは、その次代候補に名を挙げられている……もちろん、あの子が望んだことではないけれど、ね……」

言われた瞬間、クランクレイアは紫水晶の双眸を、これ以上はないというほどに大きく瞠った。

それは、これまで想像すらしたことのない未来予想図だった。

「あの子は、それを踏まえた上で、望む未来に至る道を懸命に模索しているよ。だからこそ、ここで聞いて置きたい。君は、どうするつもりなのかな?」

問われた瞬間、頭がぐるぐるになった。

思いがけない情報が、押し寄せすぎて、正常な判断ができない。

ならば……この後、できることは。

できること、はなんだろう……?

クランクレイアは、途方に暮れた。

なにもかもが、想像もしなかったことばかりだった。

「わからない……けどっ！　ギスカリールさま、あなたはわかってらっしゃるはずです！　無知なわたしに教えてください、どうか！」

それが、ギスカリールの提示した問題に対する答えとなったかどうかはわからない。

クランクレイアはただ、自分が無知であることを認め、また兄や信頼のおける侍女頭からの協力を求められないとき、本当になにもできないのだという現実を認めただけだった。

ギスカリールが、そっと息をついた。

それは、失望を示すものでこそなかったけれど、満足げなものでもなく――クランクレイアは、では及第点をもらえる答えとはなにか、を常に考えざるを得なくなった。

覚悟もない口先だけの答えなど論外。

けれど、わからないと正直に打ち明けるだけでも駄目で。
（答えを、見つけなければならない……）
それも、他者の力を頼りにすることなく、自分の力で。
それは、とても難しいことに思えたが、それでもやり遂げなければならないことなのだと、クランクレイアにはわかった。

32

いろいろなことを、本当に真剣に考えた。

その結果、アマンシールが選んだのは、選定者であるセディシャ教授との面会だった。

事前に、自らの意志を示した彼に対して、父も兄たちも反対しようとはしなかった。いま、この時、ファラスース家から次代柱神（ちゅうしん）の、それも筆頭候補が選ばれることが、ディエーンにとって好ましい未来を招くとは、彼らの誰も考えていなかったからだ。

だから、アマンシールは面会を許されたその席で、単刀直入（たんとうちょくにゅう）にずばりと選定者に言い切ったのだ。

「候補の件、辞退したいと思っているんですが」
と。
セディシャ教授は、なんとも言い難い顔になった。
「国の安定を支えるお役目を、放棄なさる、と……？」
ものすごく無責任だと、責められているような気がしたが——もしかしたら、あながち外れてもいなかったのかもしれないが——アマンシールはこくりとうなずいた。
「現在の国情を思いますと、わたしが次代さまの候補の筆頭に選ばれることは、ディエーンにとっても我が家にとっても、よいこととは思えないのです」
柱神交代の度に、各国で繰り返されてきた王朝の交代——そんな混乱を、アマンシールもその肉親も望んではいなかった。
ルーシアルにおける柱神の継承は理想的に進んだ。
なぜなら、新たに選ばれたのは、王家の直系男児だったのだから。
内乱を経ることなく、ルーシアルは平穏な次代の約束を得た。
だが、それは同時に、結ばれなかった恋人たちの悲劇を生んだ。

ディエーンにあっては、更に事情が違う。
いかに王家に縁が深かろうと、ファラスース家は臣下の家系に過ぎない。
父や兄たちが、現在の王家を支持しようとも、ファラスース家に心を寄せる者たちにまで、それを浸透させるのは難しい。
その可能性を杞憂とは呼べないほどに、支持者は多い。
先日の、アマンシール暗殺騒ぎは、それを知っているからこその、他家からの介入だったと聞いている。
二度と、誰も巻きこみたくはない。
同時に、不安な政情を招くことで、徒に騒ぎの種を蒔きたくない。
だから、候補辞退を、選定者に申し立てた。
しかし、相手はアマンシールの申し出を、受け入れてはくれなかった。
「お心のほど、よくわかりました」
答えたセディシャ教授は「しかしながら」と続けたのだ。
「暗黒期以前でありましたなら、神宝に選ばれながら辞退したという方の記録は残さ

れております……ですが、ひとが欲に走り、神宝さえ道具扱いし、真に選ばれたお方以外を、神宝の伴侶に選んだ結果、神宝の歪みは尋常ならざるところまで進んでしまいました。特に、此度の神宝『貴人の午睡』にあっては……」

逃れることのできない重荷を、アマンシールはつきつけられた。

「もはや、ぎりぎりの状態です。無理矢理次候補のお方をおつけしたとしても、壊れない保証はなく……」

天を支える柱神は、かの暗黒時代に半数近くが失われ、それと同時に、世界のあちこちに人も獣も生きられぬ、荒廃した土地が出現したと言われる。

もはや、ひとりとして、失われてはならないとの状況のもと——アマンシールの『わがまま』など、認められるはずがなかった。

セディシャ教授が示した、唯一その運命から逃れ得る方法も、アマンシールには絶対にできない方法であったから、彼は運命の一部を受け入れると同時に打開する方法を模索するしかなくなった。

絶対的な呪縛を切り捨てるには、その命を絶ちきるしかない——と言われたからこ

そ。

（死んだら、神宝との結びつきが無効化する!?）

冗談ではなかった。

ようやく、想いが通じ合って、これからの日々が待っているのだ。

アマンシールは、その日々を犠牲にするつもりなどなかった。

だが、では……いったいどうすれば、事態を円滑に収束させることができるのか……。

アマンシールは、深く思い悩んだ。

「また、えらく悩んじゃってるね」

聞き覚えのある声が耳を打った瞬間、アマンシールはその場で飛び上がりそうになった。

場所は、ロスタロイドのファラスース邸――自室で考えこんでいた彼に、声だけが届けられたのだ。

慌てて周囲を見回したが、問題の人物の影もない。

（いったい、どこから……？）

驚きながらも、彼は声の主と縁のありそうなものを思い出し、それのあるところへ近づいた。

机の上に置かれた、円形の文鎮を手に取る。

それは以前、ギスカリールが「念のために持っておけ」と言って、くれたものだった。上の面には繊細な彫刻とともに、薄く削った大理石や貴石が嵌めこまれ、蔓薔薇が描かれており、しかも底面は、鏡としか思えないほどに磨き上げられていた。

手に持ったときに感じる、ずっしりとした重みがなければ、女性用の手鏡だと言われても納得したに違いないその品は、受け取るには抵抗を覚えるものだったので――用いられている貴石自体の価値は大したことはないものの、芸術関係に造詣の深くないアマンシールにもわかるほど細工がすばらしかったのだ――最初は断ったのだが、

「役に立つ時が来ないとも限らないから」というわけのわからない説得で、いつの間にか貰うことになったのだ。

こんな文鎮が、いったいなんの役に立つというのか……貰った当初、首を傾げることしきりだったアマンシールだが、こんな風に知ることとなろうとは、想像もしていなかった。

鏡のように、磨き上げられた底面——重量さえなければ、女性用の手鏡と言われてもおかしくはない装飾……細工。

（もしかして、これって文鎮の形を取った、鏡なんじゃ……？）

という、アマンシールの考えが正しかったことは、取り上げた文鎮をひっくり返し、底面を見た瞬間に証明された。

真円の磨き上げられたそこには、ギスカリールの顔が映っていたのだ。

鏡は古来から、不思議な力を媒介する道具として用いられてきたことは知っていたが、こんな風に目の当たりにしたのは初めてのことで、アマンシールは仰天すると同時に、しみじみとギスカリールが柱神の縁者であることを実感させられた。

（そうだよな、父君の次代継承の儀が、未だすまされておられぬころに、生を受けられたクランさまが、あんな不思議な力を持ってらっしゃるんだ……すでに継承なされたお方がもうけられた御子が先祖にいらっしゃるギスカリールさんが、不思議の力や術に通じられていても、全然おかしくはないんだ……）

そう、自分に言い聞かせながら、アマンシールはため息まじりにこぼした。

「ギスカリールさん……こういうことならこういうことと、先に説明しておいていただきたかったです。誰もいないはずの部屋で、ギスカリールさんの声が聞こえた時には、ついに幻聴を聞くぐらい、精神的に危なくなったのかと思ったじゃないですか」

また、それとは別の問題もあった。

屋敷内でも、警備は厳重になっており――アマンシールの部屋の外にも、万が一の事態を懸念して、腕利きの警備員が配備されている。

アマンシールひとりきりのはずの部屋から、話し声が聞こえてきたとしたら、彼らが飛び込んで来ないとも限らないのだ。

そんな彼らが、目にするのが、手鏡相手に会話する自分の姿――というのは、幾重

もの意味でいただけない。

しかし、アマンシールの非難にも、鏡の向こうの青年は、まったく全然動じない。

「だって、使い方教えたら、お前のことだから、絶対常時持ち歩くなんて真似はしなかっただろう？」

指摘され、アマンシールは（確かに）とうなずいた。

自宅でほとんど謹慎状態になっているいまでさえ、この文鎮の特殊機能には驚かされたのだ――事前にこんな機能があることを知らされていたら、恐ろしすぎて、とても学院内で常に持ち歩くことなどできなかったに違いない。

友人とともに、講義の教室を移動中、突然宙から降ってくる知り合いの声――しかしそこに声の主はおらず、共に歩いている友人たちは慌てて周囲を見回し、やはり姿を見つけられないことに驚き……そうして、かなりの確率で恐慌状態に陥ることとなる……怖すぎる。

「……論外ですね」

「だ、ろーう？」

鏡の向こうで答えるギスカリールは、どこまでも優雅な外見とは裏腹に、突き抜けて豪快だった。

「まあ、使うことになるかどうかは、五分五分だったんだけどな。なにが起こるかわからないってことで、保険の意味で渡しといたんだが……やー、まあ、備えあれば憂いなしってのはこのことだよな」

事態が深刻化の一途を辿りつつあるこの状況で、ギスカリールだけは、どこまでも余裕を崩すことがない。

それは、彼が他国のひとであることに起因しているのかもしれないが……日一日と、緊張感が高まっていく屋敷から出られずにいるアマンシールにとっては、ありがたいものだった。

件の暗殺騒ぎの一件以来、父と兄たちの口数が微妙に減ったことを、アマンシールは気づいていた。

用いられた毒が、致死性の高い、しかも南方でしか手に入れることの出来ない稀少なものであったからだ。

諸外国との外交と商売に長けたファラスース家の息子――つまり、アマンシールを、だ――確実に葬り去るために、暗殺を示唆した黒幕は、その毒を選んだのだ。

ハーリクが、すぐにファラスース邸に運びこまれ、お抱え医師が博識なギスカリールから指示された処方を素直に受け入れ、しかも父たちが即座にその材料を入手に走らなければ……赤毛の友人の命は、とうに尽きていたはずだった。

それほどの毒を手に入れることのできる家は限られている。

すべてが、次代柱神候補を輩出した家とは限らない。

過去の血なまぐさい歴史の繰り返しにこそ、注目する者たちもいるに違いないからだ。

新たなる王家の主となれるのは、あくまで次代柱神に選ばれた人物の、近しい血縁者に限られる。

だが、新たな王が取り仕切る政治の世界にあって、第二、第三の地位に就くためには、次代柱神の血縁である必要はないのだ。

つまり、次代候補を輩出した家に、いち早く協力を申し出、しかも実行に移した名

門の一族による凶行でないとも言い切れない……。

それらの家を、残らず洗い出そうと……父たちは奔走しているのだ。

アマンシールの身を守ると同時に、無用な混乱を引き起こそうとしている勢力を、木っ端微塵にするために。

いや、もしかしたら、前者より後者を優先しているのかもしれない。

それだけの非情な気配を、アマンシールは年長の家族たちから感じ取っていた。

(もし……いまの安定した社会が、わたしの存在故に乱れるようなことになったら……あのひとたちは、どう動くんだろう……?)

ふと覚えた疑問に、アマンシールは心臓が凍り付くような衝撃を覚えた。

それは、実の肉親を疑うようなことを考えてしまった自分自身と……もしそうなったとしたら、彼らが選ぶだろう行動を確信出来てしまったという——ふたつの理由によるものだった。

ぞくり、と背筋に悪寒が走り、アマンシールは思わず身震いした。

そんなアマンシールに、鏡の中から、ギスカリールが声をかけてきたのは次の刹那

のこと――。

相変わらず、危機感などかけらも感じていない様子で、彼は「ところで、ハーリクの様子はどうなんだい？」と尋ねてきた。

深く暗い淵に沈みかけていたアマンシールの意識は、そこでいったん浮上した。

「あ、はい。どうやら、もう大丈夫らしくて……安静にしてれば、実家のほうに戻っても、大丈夫って話らしくて……」

「危険だな」

間髪を置かず、告げられた言葉に、アマンシールは険しい目になった。

「……どういうことですか？」

尋ねた彼に、鏡の向こうのギスカリールは、すぐには答えず、ため息をついた。

「わからないか？」

逆に問い返され、アマンシールは……言葉に詰まった。

全く答えが見いだせなかったからではない。

朧気ながら見えてしまったからこそ……けれど、それを認めたくないがゆえに、見

て見ぬふりをしていることを、ギスカリールに見抜かれ、糾弾されたがための反応だった。

「ことが起こったと同時に、お前自身が手配しなければならなかったことだぞ？」

突きつけられた言葉は鋭く、どこまでも正しかった。

だから、アマンシールは覚悟を決めるしかなくなったのだ。

大好きなハーリク――大事なハーリク。

王立学院に入学すること自体あり得ないとされる、大貴族出身の自分のことを、貴族にしっぽを振る犬も同然だという、心ない噂を立てられたなかでも、親身になって面倒を見てくれた。

彼と知り合えたことを、どれだけ神に感謝したことか知れない。

クランとの関係も、彼だったから――誘導尋問で引き出された分は多かったが――打ち明けたり、相談に乗ってもらったりすることができた。

彼女と心を通じ合えたことを報告したとき、誰より喜んでくれたのも彼だった。

本当にかけがえなく、大切に思っている友人――。

だからこそ、二度と自分にまつわる危険などに係わることなく、平穏無事に暮らして欲しい……そう、思ったのだけれど。

そんなことは、自分の都合のいい、言い分に過ぎないのだ。

そのことを、先ほどのギスカリールの言葉が言い当てた。

ハーリクは、本来なら助かるはずのない毒を受けて、瀕死の状態に陥ったのだ。

それを受けたのが、狙われた当人であるアマンシールであったなら、ファラスース家の必死な努力も、当然のものと見なされたことだろう。

だが、実際に毒に犯されたのは、外から見れば、学友に過ぎない少年だった。アマンシールの必死の訴えがなかったら、ファラスース家もそこまで懸命に、彼の命を繋ぐための努力を重ねたかどうか……。

それでも、現実に、ハーリクはファラスース家の全力の努力でもって、命長らえたのだ。

それはつまるところ、アマンシールがそれだけ、その少年のことを大切に思っている、なによりの証――。

ひいては、その肉親縁者も含め、アマンシールの弱点と見なされてもおかしくないということになる。

そんなことすら気づけずにいた自分の不明を恥じると同時に、父に、ハーリクの容態が変化したことを理由に、家族と親族を呼び寄せ、保護してもらえるように頼みこみ……そうして、アマンシールは、心を決めた。

いや、本当なら、もっと早くに心に決めなくてはならないことだったのだ。

それを、躊躇っていた理由は……実のところは、ただひとつ。

たった一言を、投げかけられるかもしれない、その恐れゆえに、彼は踏み出せずにいたのである。

「化け物！」

と――。

アマンシールは、ハーリクにだけは、そう呼ばれ、拒まれたくなかったのだ……。

「よう」

部屋に入るなり、寝台に半身を起こした友人が、声をかけてきた。

「ハーリク……まだ、寝てないと……」

駄目じゃないか——そう言いたいのに、これからのことを考えると、情けなくも声が震えてしまった。

赤い髪の友人は、軽く肩をすくめて「寝てばっかりいられるか。床ずれができちまう」と言ってくる。

「え？　いや、床ずれは寝返りもできない状況下で、血の流れが滞った際に起きる現象だから、寝返りをよく打ってるハーリクの場合は心配することは……」

大まじめに答えたアマンシールに、ハーリクは深く息をつくと同時にぼやいた。

「わかってたつもりだったけど……お前って、本当に天然なんだな。しかも、親父さんや兄さんたちと違って、隠し事すら満足にできないときちゃ……ほんっと、お前の進路希望は正しかったと思うよ。間違っても政治に関われそうな性格じゃないもん

な」

実家の土産物屋を大きくするために、王立学院の大学部とは別にある、経済専科に在学中の親友の目は、軽い口調とは裏腹に、鋭い光を宿していた。

アマンシールを促す眼差しだった。

「ハーリク……どうして……」

父に頼んで、アマンシールはハーリクの家族を保護してもらうつもりだった。

ギスカリールに指摘された通り、今度はハーリクの家族を人質に取られることを懸念してのことだった——そうなっては厄介だと思ったからではなく、これ以上、親友の心に負担をかけたくなかったからの選択だった。

もちろん、土産物屋を営む一家にとって、店を一時的とは言え、閉めることは死活問題となるから、その期間中の補償も、ファラスース侯爵リュシアンドは申し出たはずだった。

ところが——ハーリクの家族は、その申し出を断った。

詳しい話を聞き出したところ、それはハーリクが反対したからなのだと言う。

「どうして……」

脅しでもなんでもなく、ハーリクとその家族が危険な状況にあることは事実なのだ。

そのことは、父がしっかり説明したはずだというのに……なぜ、彼はうなずいてくれないのか……。

「ハーリク。本当に……大袈裟じゃなく、本当に、危険なんだよ。お願いだから、家族のひとを説得してよ……」

泣きそうな顔で、アマンシールは訴えた。

けれど、ようやく寝台の上で起きあがれるようになったばかりの友人は、うなずいてはくれなかった。

「納得できる理由を聞けば、な」

「だから……！　父も言ったろう!?　いま、ファラスース家は立場上難しい状況に立たされていて、この間の騒ぎも、その延長だったんだって！　脅しなんかじゃなくて、あっちは本気でこちらの命を狙ってきてて……だから、うちの家族が親しくつき

あってる人間やその家族まで狙われる可能性が高いんだってこと！」

「うん。それは聞いた」

「なら……っっ！」

「でも、得心が行かない。嘘だとは思わない……けど、まるっきり本当のことだとも思えなかったんだ。なあ……アマンシール？　いったい、なにを隠してるんだ？　親父さんの言ったことが、正真正銘の事実なら、この屋敷には、もっとごろごろ、緊急避難してきた家族連れが屯してなきゃおかしいはずだぞ？　そりゃあ、もちろん、侯爵家とつきあいのあるような家なら、自衛できるって考えもできるが……どうしても、納得できないんだ。ノーシャンのやつが振り回してた短刀は、かすっただけだった。なのにおれは死にかけた……なんでだ？　何で、お前が致死毒を塗った刃物で襲われなければならないんだ？」

鋭すぎる疑問に、アマンシールは返す言葉がなかった。

思えば、知り合って以来、ハーリクの洞察力と観察眼から逃れて、なにかできたことなど、なかったのだ……。



「問題なのは、ファラスース家じゃ、ないんだろう？　おれは、お前からそのことを聞きたいんだ。なんで、侯爵閣下やその跡継ぎになられそうな上のおふたりでなく、お前自身の命が狙われるのか……どうしても答えないつもりなら、卑怯なことは百も承知だが、命の恩人の権利を行使してでも聞き出すぞ」

それでも、ハーリクは「命の恩人の命令だ、吐け」とは言わなかった。

どこまでも、こちらの意志を尊重してくれる言葉に、アマンシールは目頭が熱くなった。

父の、わかりやすい説明に納得してくれなかった、厄介で残酷な友人。

告げられた内容から、真実だけを掬い取った、聡明すぎる親友。

ギスカリールに促されつつも、まだ躊躇いの残っていた心がほどかれていく。

「わたしは……ひとではなくなるんだ……！」

絞り出すように、アマンシールは告白した。

赤い髪の友人は、つまらなそうに言った。

「それはひとの心をなくすって意味か？　それとも、土いじりしてた時、得体の知れ

ないなんかに触れるか、口に入れたせいで、わけのわからないモノに変容するって意味か？」

決死の覚悟の告白に対する親友の反応に、アマンシールは思わずがくりと肩を落とした。

（ハーリク……この場面で、その冗談はないよ……）

と思った彼は、しかし満更冗談でない可能性に気づき、返答に窮した。

……ハーリクは、こと商売に関しては、どこまでも現実的であるにも拘わらず、大の秘境冒険読み物好きなのだ。

（ま、まさか、本気で言ってるんじゃないよな……？）

自問するも、答えは出ない。

そんなアマンシールに追い打ちをかけるように、ハーリクが告げた。

「冗談に決まってるだろ、馬鹿」

今度こそ、完全に脱力してしまったアマンシールに、親友は呆れたように息をつきながら、仕方なさそうにこう言った。

「柱神さまになるからって、心まで変わるわけじゃないんだろう？　だったら、そんな、この世の終わりみたいな顔するんじゃない」

驚愕に、アマンシールは凍り付いた。

なぜ、そのことをハーリクが知っているというのか――彼もまた、柱神とは天から降臨するものだと信じていたはずだというのに。

口の中が、からからに渇いて、満足に声を紡ぐことができない。

「……ハーリク……なんで……」

かすれた声で、ようやく絞り出した問いに答えたのは――。

『もちろん、わたしが教えたんだよ』

懐にしまい込んでいた円形の文鎮から、ギスカリールの罪悪感皆無の声が聞こえてきた――。

33

ロスタロイドにおけるファラスース邸にあって、アマンシールにできることは限られていた――というか、ほとんどなかった。

この四年というもの、かなり本気で政治や国内外の情勢について学んできたつもりだったのだが、彼が渦中に巻き込まれた事態は、知識があっても実践経験皆無の彼の手に負えるものではなかったのだ。

しかも、再度の襲撃を恐れる父兄によって、完全外出禁止を言い渡されたアマンシールにとって、ハーリクの部屋――もちろん、父が用意したもので、いまではその近くの部屋に、親友の家族が移ってきているのだが――は、唯一気を抜ける場所だった。

次代の柱神に選ばれたことを知っても、「お前はお前だろう?」と言って、恐れたり畏まったりしなかった友人は、アマンシールにとってかけがえのない存在となっていた。それに加えて、利点はもうひとつ――。

『とにかく、クラン嬢の意志を確かめるのが、最優先事項だな』

文鎮の底面に姿を映したギスカリールが言うと、ハーリクも寝台に身を起こして、うんうんとうなずいた。

「確かに。でも、ギスカリールさん、その前に、こいつの覚悟のほどを聞いておかないと、話になりません。ぽやーっとしたとこのあるやつだから、多分、事態の半分ぐらいしか把握できてないと思いますよ」

同い年なのに、なぜか年上ぶった言葉に、かちんとくるものを感じる。

「なんだよ、そのぽやーっとした、ってのは!? わたしだって、一所懸命、いろいろ考えてるのに……!」

自宅だということもあってか、アマンシールの一人称は『わたし』に戻っている――否、素の彼が露わになっていると言うべきか。

しかし、親友が『神様』になることを知っても、態度を変えなかった少年の口に遠慮はなかった。

「ふうん？　例えば、どんなことを？」

挑戦的に問われ、むっとしながらアマンシールは答えた。

「……だから、クランさまの実の母君であるオルレイジアさまのことがあるから、多分陛下もフィオーンさまも、このことを知られたら、きっといい顔はなさらないだろうから……どうやって説得しようか、とか……」

それを聞いた瞬間、ハーリクとギスカリールが同時に息をついた――さも呆れたと言わんばかりに。

「な、なんだよ!?」

問いかけたアマンシールを無視するように、ハーリクは文鎮という形を取った鏡のなかの青年に嘆いてみせた。

「聞きましたか、ギスカリールさん。こいつ、本当にわかってない……」

鏡を介しての参加者であるギスカリールも、うむ、と頷いた。

「うん、本当にわかってないな」

「いったい、なんの話です!?」

問いかけたアマンシールの頬に、ぺちん、と軽い衝撃が加えられたのは、次の瞬間のことだった。

寝台に、半身を起こしたハーリクがはたいたのだ。

「お前自身に、どんだけの覚悟があるかって話をしてるんだよ。いいか、ルーシアルの御方は、神宝に選ばれて、十年もの間意識を失われ……世間には亡くなられたと発表されたんだぞ？　同じようなことが、お前の身に起こらないとも限らないんだ。そのときのことを、おまえは一体どう考えてるんだ？」

それは、アマンシールが真っ先に考えて……けれど考えたくなくて、目を塞いでいたことだった。

選定者であるウァランセイド・セディシャは、神宝である『貴神の午睡』は、すでにぎりぎりの状態で安定を保っているのだと言っていた。

大きな歪みを抱えた神宝ほど、ひとの身を神のそれに変えるのに時間がかかる傾向

が強い、とも――。

意識を保ったままで、その変化のときを迎えるのなら、いい。

意識がある限り、どんな不調を押しても、頑張るつもりも覚悟もある。

けれど、意識を失い、深い昏睡状態に陥るようなことになったら……？

しかも、その目覚めが、いつ訪れるとも知れぬものであったなら……？

それでも「待っていてほしい」などとは――。

ふい、とアマンシールは親友から目を逸らした。

と、その瞬間、今度は平手ではなく、こぶしが飛んできた。

「そこんところがわかってないって言ってんだよ！」

痛みとともに、怒りを孕んだ親友の声がぶつけられた。

「お前が、勝手に自己完結するのは自由だって、言えないこともないけどな、それがクランクレイアさまの意志をとことん無視した傲慢な行為だって自覚ぐらいは持てよ？」

思いもかけないことを告げられ、アマンシールは目を瞬かせた。

（クランさまの……意志？）

確かに、それは確かめる必要のあることには違いない。

けれど――。

ふるふると、アマンシールは頭を振った。

「どれだけかかるかわからないのに、待っていてほしいだなんて、言えっこないよ……ルーシアルの御方は、ご自分の身になにが起こるのかご存じでなかったから、仰ることができたんだろうけど……」

もしも十年……いや、もしかしたらそれ以上の時間を要するかもしれない。

そんな長期間、これから花開こうとしているクランクレイアを束縛することはできない……できるはずがない。

しかし、そう言ったアマンシールの顔面に、拳骨第二弾が飛んできた。

鏡ごしに「おー、よくやった！　わたしの分まで、あと二三発追加してくれ」と、ギスカリールが声をかけてくる。

「なんなんだよ!?」

意味がわからず、思わず親友を睨みつけると、赤毛の少年は、ずいっと彼の鼻先に指をつきつけた。

「待つか、待たないかを決めるのは、クランクレイアさまなんだよ！　お前が勝手に決めつけていいことじゃないんだってこと、いいかげんわかれっての。いま、一番問題なのは、お前がクランクレイアさまに待っていてほしいかどうかってことだろうが！　そりゃあ、これから青春まっしぐらの彼女が、いつ目覚めるかもわからないお前のことを、どれぐらい待ってくれるかは、それこそ神のみぞ知るってところだろうが……重要なのは、そんなことじゃない」

なにげにひどい言葉を吐く親友だった。

気にしているだけに、ざくりざくりと心に傷が走る。

「大切なのは、お前がクランクレイアさまに待っていてほしいと思っているかどうか、だろうが！　でもって、奇跡的にあの方が、お前が目覚めるまでずーっと、待っててくださったとして、お前が目覚めたとき、彼女が中年女性になってたとしても……もっとひどい場合、しわしわのお婆さんになってたとしても、変わらず愛しく思

えるかってことだ。そこんところを抜きにして、お為ごかしなこと言ってんじゃねえっての」

（奇跡的に……とか、しわしわのお婆さんだとか……ハーリク、言葉に容赦がなさすぎ……）

とは思ったものの、確かにその言葉にはうなずかされるだけの説得力があったので、アマンシールは真面目に考えてみた。

まずは、中年女性になったクランクレイアの姿を想像する——次いで、しわしわのお婆さん姿も。

あくまで想像なので、現実にそうなるとは限らないが、どちらの姿も可愛らしさを残した姿となって脳裏に浮かんだ。それは、彼女の紫水晶の瞳に浮かぶ光を、ずっと見てきたからこそのことだったかもしれない。

傷ついても悩んでも、その優しさと繊細さと勝ち気さが曇ることのなかった、あの瞳——。

あの瞳がある限り、自分はクランクレイアを愛しく思わずにはいられないだろう。

「わかったか？」

問いかけてきたハーリクに、心から感謝しつつ、アマンシールは「うん」とうなずいた。

是か否か、そしてたとえ「是」と答えたとしても、いつまで待つかは彼女が決めるべきことなのだ――自分の事情と思いを伝えることが、彼女を縛る枷になるかもしれないなどとは、とんだ思い上がりだった。

彼女はいつだって、自分の意志で、そのときの自分自身のあり方を選び取る。

心ない周囲の噂に心傷つけられていた幼いころでさえ、隠れて泣くことこそあったが、彼女は常に毅然と頭をあげ、正面を見据えていた。

うなずいてくれるかどうかは、正直なところわからない。

彼女には、生母であるオルレイジア姫の悲運の影が、長くつきまとっていたのだから。

それでも、うなずいてくれたなら――。

（わたしは、全身全霊をもって、クランさまを支え、守ろう）

と、アマンシールは心に決めた。

問題が山積していることはわかっていたが、それでも目の前の親友と、家族と、ギスカリールがいてくれる限り、なんとかなるような気がした。

そのころ、アマンシールの父兄たちは、深刻な顔で事態について話し合っていた。

場所は、リュシアンドの執務室――人払いをかけた上で、彼らはいくつかの品を前に、ため息をついていた。

「博物学と天文学の専門書に、天文観測用の望遠鏡に、土壌改良における助言を求める手紙……どうやら送り主たちは、うちの末息子の嗜好を良く調べているらしいな」

アマンシール宛に送られてきた、それらの品には、どれにも毒が塗布されていた。

肌から染みこむ猛毒ばかりで、頭が痛いことに、全部種類が違っていた。

おかげで送り主が全員違うのか、それとも一部は重複しているのかさえ、特定が難

しい。

しかも、それらの毒は解毒方法が知られているものと、あまり知られていないもの、ほとんど知られていないものに分かれていた。

「異変に気づいてすぐ解毒できるやつは、まあ完全に脅し目的でしょうね。怖い目にあいたくなければ、次代候補からおりろってところでしょう」

ファバルワースは面白くなさそうに、肩をすくめた。

「ああ……辞退ができるものかどうかもわからない門外漢だ。多分、他の候補の親族か、うちがこれ以上大きくなるのを喜ばない輩の仕業だろう。まったく、神の血縁になど、なりたがるやつらの気が知れないな。そういうやつに限って、誰もがみな自分と同じように感じていると思いこむのだから……」

チェルギースの声は、暗く沈んでいた。

「三つ目は、本気であれを殺すつもりで送りこんできたと見てまず間違いなかろう。先日のやつといい、表で手に入れられるものではないからな。あれが一時期、毒物に興味を示したときは頭を抱えたものだが……なにがどう幸いするか、知れないものだ

な」

一時期、アマンシールが薬草学の延長で、毒草及び毒物全般に興味を示したとき、そのあまりに外聞の悪い好奇心に——そんなことが知れようものなら、世間がいったいどう噂するかもしれないということで——ほとほと手を焼いた記憶のあるリュシアンドは、なんとも複雑な顔でつぶやいた。

反対しても、自分で勝手に収集しかねない息子の性格を知っていたリュシアンドは、あくまで情報だけ、という条件で、いろいろ手を尽くして調べさせた結果をアマンシールに渡したわけなのだが、その際作った伝が、今回届けられた毒の解明に大いに役立っているあたり、怪我の功名とはこのことだと思う。

「まあ、あいつの運がそれだけ強いってことでしょうね。だが、問題なのは二番目ですよね……死んでも助かっても構わないってあたり、なんだか不気味な意図が感じられるような感じられないような……」

とぼけた物言いが特徴の、ファラスース家の次男も、さすがに神妙な顔で洩らした。

「あるいは、ファラスースが、あいつを助けるかどうかを見定めようとする何者かがいるのか……だな」

チェルギースの、非情とも言える言葉に、しかしリュシアンドもファバルワースも非難の声を上げることはなかった。

それもまた、選択肢のひとつであることに、違いはないからだ。

他のどんな問題が持ち上がろうと——無論、アマンシールが断罪されなければならないような大罪を犯した場合は別として——彼らがその道を選ぶことはあり得ない。大貴族にありがちな、肉親同士の利得を巡る確執は、ファラスース家にあっては無縁なものだったからだ。

だが、この問題に関してだけは、その非情な選択肢を切り捨てるわけにはいかない……いかないだけの事情があったのだ……。

ディエーンにあって、二世紀から三世紀に一度起こる王家の交代劇は、常に国土と民を巻き込み、困窮と悲嘆をもたらしてきた。

ある者は野心から、またある者は腐敗した王家から国を救済するために、兵を挙げ、戦いを繰り返してきた。

結果的に、新たな柱神に連なる者が勝利をおさめてきたものの、そこに至るまでには、毎回夥しい血が流されたこと、言うまでもない。

いかに言葉を飾ろうと、それが内乱でしかないことは明らかで、その度に真っ先に犠牲になるのは市井の民だったのだから。

民あってこその国だというのに、その民が困窮し、疲弊して、国が荒れないわけがない。

勝敗が決した後も、国が完全に立ち直るまでには相当な時間がかかる。

それでも、ひとつだけ幸いと呼べることがあるとするなら、内乱の騒ぎに乗じて、他国からの侵略を受ける事態に陥らなかったことだ。

ディエーンが大国であることもさることながら、建国以来、絶えず柱神の加護を受

けてきたという事実が大きい。

柱神の加護を持たぬ国々が、戦を仕掛けるほどに豊かでない――というわけではない。近隣の諸国は、柱神の加護を得たディエーンを攻めることで、神々の怒りを買うことを恐れたのである。

しかし、今回ばかりは事情が違う。

ここ数十年の間に、見る見る勢力を拡大してきた軍事国家ガッシュマサラの国王オルキン三世は、柱神の加護ゆえに豊かさを失わぬディエーンに、羨望や畏敬の念ではなく、はっきりとした欲望を向けてきていた。

このままでは、早晩戦になることを懸念した、ディエーンの上層部が選んだ道は、婚姻による同盟関係を築くことだった。

幸い、当時の王太子――現在の国王だが――は独身であり、またガッシュマサラにも似合いの年頃の王女がいたこともあって、両国間で話はとんとん拍子に進んだ。

そうして、嫁いできたガッシュマサラ王女ウルスメイアは、ふたりの王子を産み、その長子フィオーンは国王が即位すると同時に王太子に立てられた。

ディエーン国王の舅、未来の国王の外祖父という立場に、いまのところ、ガッシュマサラ国王は満足しているようで、ここ二十年ほどは、両国の間で、深刻な問題が持ち上がることはなかった。

だが——此度の柱神交代によって、内乱が勃発したとしたら、黙って指をくわえて見ているはずがない。

娘婿、あるいは孫を助けるという名目で、嘴を突っ込んでくることは必至——恐らくは、柱神ごと、ディエーンを手に入れようとするだろう。

ただの内乱ではおさまらない——国そのものが危険にさらされることになるのだ。

次代候補に選ばれた者たちの親族の多くが、そのことに気づいていない。否、柱神の加護あるこの国に、そのような不遜な思いを抱く国などあろうはずがないと、高を括っている節がある。

何度か、使節としてガッシュマサラを訪れ、オルキン三世そのひとと、直に会ったことのあるリュシアンドにしてみれば、それがとんでもない思い違いだということがわかっている。

だからこそ、内乱が起こらぬよう、いくつもの布石を打ってきたのだ……だのに、なぜよりにもよって、マルシアス家の子息と自分の息子が選ばれてしまったのか……ディエーン国内で、最も望ましくない二家の子供だというのに。

現王家への反感を隠そうともしない南の大家と、王家に近しいからこそ、常に注意深く振る舞わざるを得ないファラスース家――あらぬ誤解や混乱を招かぬためには、このふたりに命を落としてもらうのが、一番の早道だ。

しかし、そうとわかっていても、リュシアンドはその決断を下すことはできなかった――取れる手段の全てを試していない今は、まだ。

だが、やれることをやり尽くした上で、それでも、それしか道が残されなかったとしたら……そのときは。

あまりにも、重く暗い予感に、リュシアンドは深く嘆息した。

そんな彼に、チェルギースが問いかけた。

「いっそ、死んだことにでもして、どこかに逃がしますか？」

しかし、神殿の事情に詳しいファバルワースがかぶりをふった。

「人間は騙せても、神の息吹を受けた神宝は騙せませんよ。あいつが生きている限り、件の神宝は、他の誰かを半身とは認めないでしょう。神殿も選定者殿も、これ以上神宝を歪ませるわけにはいかないと考える以上、どうあってもあいつを捜し出すために手を尽くすでしょう……それが、どれほど密かに行われたとしても、その動きを他候補を抱えた各家が見逃すとは思えない。逃がすことは無理です、兄上。そんなことをしたら、逆にあいつの命を縮めることになってしまう」

ファバルワースが言わなかった言葉を、リュシアンドは読み取った。

あくまでも、アマンシールが次代となることを拒みつづけた場合、すでに当代柱神コーランジュが、その命の終焉を間近に控えていることを知る神殿上層部は、早急且つ安全に、次の守護者を得るために、彼の命を狙う可能性すらあるのだ。

人ではない存在に生まれ変わることを、アマンシールは受け入れがたく感じているようだが、そのあたりのことを説得するのは難しくはない——今の時点では。

しかし、神宝に選ばれ、そのことを彼が受け入れたとき、失われるものを、本人が知ったとき……彼は決してうなずこうとはしないだろうことがわかるだけに、リュシ

アンドの心は重くなるのだ。

「では、ファバルワース。あれの扱いはどうすべきだと思う？」

父親に問いかけられた瞬間、ファバルワースはイヤそうに顔を歪めた。

口にしたくないことを、無理矢理引き出そうとする父親に、ちらりと恨みがましげな視線を投じた後、彼は答えた。

「神殿に、籍を用意して放りこむしかないでしょうね」

予想通りの答えだったのか、リュシアンドは表情一つ変えなかった。

代わりに疑問を口にしたのはチェルギースだった。

「神官にするというのか？　しかし、それだけでは俗世と完全に切り離されたとは言えないだろう……現に、二代前の御方は、神官位についてらしたはずだが――」

それでも、彼の弟により、王家の交代は行われてしまった。

神殿に入ったからと、アマンシールがファラスース家とはもはや何の縁もない人間だと言っても、誰も納得しないだろう。

それに……なにより――。

「神殿には、例のマルシアス家の候補がいるのだろう？　もし刺客の手引きでもされてしまったら、取り返しのつかないことになるんじゃないか？」

問いかけた長兄に、ファバルワースは「それに関しては大丈夫です……あれが、王家の贄の宮になれば、誰も手出しはできなくなりますから」と答えた。

「贄の、宮……？」

聞き慣れぬ言葉に、チェルギースが首をかしげる。

しかし、今度ばかりはファバルワースも答えようとはしなかった。

代わりに答えたのはリュシアンドだった。

「国のためだけに祈る神官だ。国の繁栄と安寧を祈りつづける、国内にただひとりの神官であるため、虹神全神殿の神官位を授けられる。実権はないも同然だが、その地位は各神殿の最高司祭の上に位置づけられている」

父親の説明に、チェルギースは眉宇をひそめた。

「なにやら、その説明だけを聞いてますと、良いことずくめのように思えますが、それにしては呼び名が物騒ですね、贄の宮、とは」

探るような目を、彼は父親に向けた。

「国のためだけに存在する神官だというのなら、その贄の宮とやらは、国が危機に直面したとき、文字通り生け贄に捧げられるということではないのですか？」

答えは、返らなかった——それが、なによりの、答え。

チェルギースが声を荒げた。

「あれが次代に選ばれれば、確かに何の問題もないかもしれません！　神の眷族（けんぞく）となった時点で、あれは役目から解放されるのですから。ですが、万が一、あれが次代に選ばれなかったら、どうなるのです!?　ひとの身のまま、そのような役目を背負えば、早晩人身御供（ひとみごくう）にされるのは目に見えているではありませんか。それに、クランクレイアさまとのことは……」

返すリュシアンドの口調は、なにかをかみ殺したかのように、妙に淡々としていた。

「……致し方あるまい。どちらにせよ、こうなってしまった以上、あのふたりには先がないのだから……」

それがわからぬほど、チェルギースは愚鈍ではなく、だからこそ、やりきれない思いに唇を噛みしめた。

……そう、確かにこうなってしまった以上、アマンシールとクランクレイアが、当たり前に信じていた未来は訪れるはずがないのだ。

34

文鎮状の鏡の向こうから、ギスカリールはとんでもないことを提案してきた。
『駆け落ち、しちまえ』
聞いてすぐには、アマンシールにはその意味が理解できなかった。
「はあ？」
『だから、とっととさっさと、お嬢かっさらって、選定者のジジィんとこから神宝かっぱらって、ふたりでどっかの僻地にでも雲隠れしろって言ってんだよ』
いつもとは違いすぎる、ギスカリールの乱暴な物言いにまず驚き、次いでその言葉の内容に驚かされた。
「えーっと、その、つまり、どういうことです？」

混乱しながら、尋ねたアマンシールに、「どうもこうも」と言って、ギスカリールが話してくれたのは、これまで信じて疑ったこともなかった、父と兄たちの話し合いの内容だった。

「贄の宮……？」

その、耳慣れぬ言葉に、しかし不穏なものを感じ取ったアマンシールは、はっきりと尋ねるのを躊躇った。

「……暗黒時代に生まれた悪習だ。虹神全神殿の洗礼を受けさせ、聖別された高貴な人間をそう呼ぶんだ。国内における最高位の神官で、その務めは、国の繁栄と安泰を日々祈りつづけること。言うなれば、天と地の間の空ではなく、人心を支える柱神のようなものだな」

ギスカリールの説明はわかりやすかったが、なにか釈然としなかった——聞いた限りにおいては、悪い意味合いを持つ役目とは思えなかったからだ。

だが、贄の宮、とは響きが不吉すぎる——しかも、ギスカリールははっきりと『悪習』だと言い切ったのだ。

「……どういうあたりが悪習なんですか？　ディエーンでは、ついぞ聞いた覚えがないのはそのせいですか？」

尋ねた彼に、ギスカリールは苦い顔でうなずいた。

「未だに常時、抱えているのは、柱神のいない国ぐらいだろうな……。言葉通り、贄の宮とは、国を安泰に導くための、神々への供物なのさ。平和なときは、祈り三昧の日々を送り、いざ危機が迫ったら、国を救うために、自ら神々の元へ赴く――と、まあ、そういう役目だ」

神々の元へ赴く――それは、肉体を持つ身ではかなわないことだ。

「……つまり、死ぬための役目なんですね。けれど、ディエーンでそんな方のことは、聞いたことがありません。存在しない役職につけようとしても、無理なんじゃありませんか？」

「常時抱えてるのはって、断っただろうが。ディエーンだって、過去何人も贄の宮を用意してきたんだ。存在しないわけじゃない。まあ、二三世紀に一度立てられるのがせいぜいだから、お前が聞いたことがないのは、無理ないけどな……」

ギスカリールの言葉に、アマンシールは引っかかりを覚えた。

（二三世紀に一度……？　それって……）

柱神の交代時期と、重なるのではないのか？

アマンシールの思いを読み取ってか、「気づいたようだな」と告げてきた。

「ディエーンでは、当代さまに衰えの兆しが見え始めると同時に、贄の宮を用意してきたんだよ……来るべき時、混乱が起こらないように――とな。結局立てても、内乱は起こったわけだが、贄の宮が神々に直に懇願してくれたから、あの程度の被害ですんだんだって考える連中もいないわけじゃない」

主に神官たちだがな――つぶやくギスカリールの双眸は、暗い翳りを帯びていた。

「本来なら、とっくに王家の誰かが立てられていたはずなんだ。尤も、当代さまがご自身の不調を、ひた隠しにしておいでだったから、知ったのはここ数ヶ月の間だろう……。だが、クアン・クランドの娘であるクラン嬢を立てるわけにはいかない――ルーシアルとの国際問題に発展すること間違いなしだからな。第二王子ケルティスは、母親である王妃が頑として認めない。彼女の言葉はガッシュマサラのオルキン三世の

言葉も同じだからな、波風は立てられない。かといって、王家に近しい親族たちは、いざという時、協力してもらわなければならないから、やはりあまり無理は言えない。とまあ、こんな事情だからな、お前の親父さんが、お前を贄の宮にって言い出したら、きっと渡りに船とばかりに国王は飛びつくだろうよ。ファラスース家は、かなり王家に近い血統だしな」

ことのなげに言われ、アマンシールはぞくりとするものを感じた。

政治の抱える闇をかいま見た瞬間、いつも覚える恐怖にも似た思いだ。

（父上は……わかる。わたしが次代に選ばれると確信してらっしゃるから……絶対贄にされることはないと思ってらっしゃるからだ、って……。でも、陛下は……陛下が……）

クランクレイアと心が通じ合ったことを報告した時、彼は心から喜んでくれていたように見えた。

（……それなのに……？）

そこまで考え、アマンシールはあることに気づいた。

「ちょ、ちょっと待ってください！　陛下は、わたしが次代候補に挙げられたことをご存じないのでしょう!?　それなのに、そんな役目にわたしを推挙したりしたら、父上は却って陛下のご不審を買うのではありませんか？」

クランクレイアの、内々とはいえ、婚約者である自分に、国王がそんな役目を与えるはずがない――とは、アマンシールは思わなかった。

統治者とは、ときとして肉親さえも切り捨てる覚悟で、政に取り組んでいるものだからだ。

国王は、きっと自分を惜しもうとも、必要とあれば死地に送り込むだろう。

だが、贄の宮という存在の意味を知る父が、我が子を推したなら……国王がなにも感じないはずがないではないか。

しかし、アマンシールのそんな疑問は、ギスカリールの残酷な説明によって解消された……解消されてしまったのだ。

「国王は、不審になど思わないさ。よくぞ心を決めてくれたと、涙を流して侯爵に感謝するだろうよ……当代さまの不調が明らかになった以上、おまえとクラン嬢の婚約

を認めるわけにはいかなくなったわけだからな」

頭が、まっ白になった。

「な、な、な、なぜですっっっ!?」

あまりの衝撃に、声が裏返る。

「でかい声を出すな。不審に思われた挙げ句、この文鎮取り上げられたらどうするんだ、連絡の取りようがなくなるんだぞ」

「す、すみません。でも、なんでそんな話になるんですか!?」

（ま、まだ、わたしはクランさまからお返事もらってないぞ!?　というか、決意のほどを打ち明けても、それでも一緒になって下さいってお願いもしてないのに!?　そう言えば、ギスカリールさんが、わたしが次代候補になったことは教えたとか言ってたっけ……や、やっぱり、いつ目覚めるかも知れない相手を待つのはイヤだってことだろうか？　それとも、神籍に入ってしまったら、人間としての戸籍が抹消されて、きちんと正式に結婚できないから、だとか？　オルレイジアさまのことがあって、辛い思いをなさったから、その線はありそうかも……）

頭ぐるぐる状態になり、アマンシールはわたわたした。

「そ、そうだよな……花嫁衣装って、女の子にとっては特別だって話だし。きちんと結婚しない限り、着られないってことになったら、誰だって考えちゃうよな……」

混乱するあまり、彼はいつの間にか、思いがそのまま口に出ていることにも気づかなかった。

その意識を、現実に引き戻してくれたのはギスカリールだった。

「もしもーし。能天気な想像で悩んでるとこ、悪いんだけど。事態はもっと深刻だってこと、本当にわかってないのか？」

（いや、これだって、充分深刻な問題だと思うんだけど……）

そう思い、つい首をかしげてしまったアマンシールの顔を見て、ギスカリールはそれこそ盛大に息をついた。

「……どうやら、本当にわかってないらしいな」

そうして、ギスカリールが説明してくれた内容が、頭にしみこむにつれて、アマンシールの顔からは血の気が引いていった。

勤勉に学んだとはいえ、彼は政治や外交に関して、圧倒的に経験値が不足しており、父や国王たちが、なにをどう判断するのか、読み切れてはいなかったのだ……。

頭を抱え込んでしまったアマンシールが、相談できる相手はハーリクしかいなかった。

悲壮な顔で部屋に現れた彼を見た瞬間、まだ安静が必要なはずの親友は、血相を変えて寝台から飛び出しかけ、ちょうど看病していたその兄に、力ずくで引き戻された。

そうして、勘の良さを発揮して、ふたりがなにかを言うより先に、「ちょっと一服してくる」と言って、部屋を出て行ってくれた。

その心遣いに感謝しながら、アマンシールはおずおずとハーリクに近づいた。

寝台の横に置かれた椅子に腰を下ろすと同時に、赤い髪の友人は、早速「で？」と

問いかけてきた。

「いや……別に……。その、どんな様子かな、と思って……」

今更だったが、親友を訪ねたことを後悔しながら、アマンシールはなんとかもっともらしい理由を考えようとした。

ギスカリールから聞かされた話が、あまりにもショックで、とてもひとりでは手に負えないと思ったからこそ、ハーリクに会いにきたのだが、よく考えてみれば、国の大事に係わることなのだ。

当事者である自分は逃げるわけにはいかないが、そのことでハーリクに相談を持ちかけるということは、彼まで巻き込むことになるのだと、遅まきながら気づいたからだった。

ただでさえ、ハーリクには多大な迷惑をかけてしまっている。

自分を庇ったせいで、命を落としかけた親友に、これ以上負担をかけるわけにはいかない——と、思ったわけだが、どうやらそれは、遅きに失したものだったらしい。

「んな顔して、なに言ってんだか。いいから話してみろよ、お手上げだと思ったら、

正直にそう言って匙投げるからさ」

わざと軽く言うのが、ハーリクの心遣いだとわかる。

本当に、この親友は、ひとの心の機微に敏感なのだと思い知らされ、アマンシールは泣きたいような、笑いたいような、自分でもよくわからない感情に襲われた。

「……ちょっと、ショックな話を聞かされたものだから……」

落ち込んじゃって――と前置きした彼に、ハーリクは「ふうん？」と言いながら、もそもそと寝台に体を起こした。

同年代の平均身長に、少々届かない親友は、見下ろされて会話するのをなにより嫌っているのだ。

「親父さんか、兄貴さんたちにか？　それともギスカリールさんに？」

「ギスカリールさん経由で、父上たちが考えてること、かな……」

内容を思い出し、またしてもどんよりと落ち込んでしまう。

そんな彼の顔を見て、ハーリクはかすかに眉宇をひそめた。

「その様子だと、クランクレイアさま関連事項だな。どうした、まさか、いまさらふ

たりの仲を認めるわけにはいかないとか、言われたわけじゃないんだろう？」

言われた瞬間、アマンシールは驚きのあまり、息を詰めた。

「ハーリク……もしかして、千里眼？」

その言葉に、ハーリクはがっくりと肩を落とした。

「馬っ鹿。そんな便利な特技があったら、占い師でも開業して、いまごろ左団扇だよ。お前って、ほんと、自分のこと、わかってないんだなー。お前、自分についてはいつだって、無頓着で、よほどのことがない限り、腰を上げようともしない横着者だって自覚、ある？　ないだろ？　ノーシャンのやつも、どんな嫌がらせしても、お前が一向に堪えた様子がなかったから、どんどん悪質な手に走るようになっていったんだぜ？　まあ、あんなやつを満足させるために、こっちが折れてやる義理なんかはないわけだから、全然構わないんだがな」

八年来の親友の言葉には、遠慮会釈というものがいっさいなかった。

（もしかして、責められてるんだろうか……？）

と、アマンシールが思った瞬間のこと、不意にハーリクが、くすりと笑った。

「ところが、お前ったら、クランクレイアさまが係わるとなると、こいつ馬鹿かってぐらいに感情表現が豊かになるんだよなー。『クランさまを怒らせてしまったみたいだ、どうしよう!?』と言ってはわたわたし、『クランさまは花を育てるのがお好きらしい』と言ってはせっせといろんな花の種を集めまくり……もー、見てるだけでもろわかり状態だったってのに、本人だけが自覚なくって、傍で見てて、面白かったなー」

からからと笑って、ハーリクは告げた。

「……だからさ。お前がそこまで狼狽えてるのは、きっとクランクレイアさまに関することに違いないってことぐらい、つきあい長い連中にはお見通しなんだよ。でもって、あっさりこっちの引っかけにもかかりやがって……いったい、どうした事情で、いまになって、お前とクランクレイアさまのことが認められないんだって？　腹立つなぁ。けしかけてきたのは向こうのほうだってのに、いまさらゴメン、はないだろうよ？　つーわけで、おれも全然納得できないから、聞かされた話、全部話せ」

それでも、アマンシールとしては迷うところが大きく、「いや、あの、その」と言

葉を濁したのだけれど、ハーリクに「四の五の言ってないで、いいから話せ！」と一喝され、観念した。

自分の立場だとか、ファラスース家の状況だとか、クランクレイアに周囲が認めている価値だとか……考えれば考えるだけ、頭ぐるぐる状態に陥っていたアマンシールは、正直なところ、本音で相談に乗ってくれる相手に飢えていたのだ。

強引に話を促してきたハーリクの言動に、そんな自分に対する思いやりを感じ取り、彼は、話すだけは話してみようというつもりになった。

親友に負担をかけるのではなく、自分なりに今現在の状況を言葉にすることによって、頭を整理しよう――と思ったのだ。

が……。

あまり、それはうまく行かなかった。

冷静に考えれば考えるだけ、事態の深刻さだけが浮き彫りにされてしまう状況だったせいである。

そんな、アマンシールに親友は、ふぅぅ、と特大のため息をひとつ洩らして、こう

告げた。

「そいつは……ギスカリールさんの言うとおり、神宝かっさらって、クランクレイアさまと駆け落ちするしかねーんじゃねえの……？」

がっくりとうなだれてしまったアマンシールだった。

現在のディエーン王家は、深刻な外患内憂を抱え込んでいると言っても差し支えない。

外患とはまさしく、縁戚となったガッシュマサラの動向だ。

内憂は、次代柱神選出において、どの家がその『次代』を輩出するか――である。

その家がどこになるのかで、事態は大きく変わってくる。

ファラスース家の第三子であるアマンシールが、次代柱神の候補に挙げられるということは、何重の意味でも危険を孕んだものだった。

ファラスース家の血は、現王家エルスース家のそれに遠すぎず、近すぎない。それは、皮肉にも、これまでその時期ごとに王家の交代を繰り返してきた家そのものの特徴だったのだ。

しかも、由緒を誇るしか能のない名家でもない。その身内から次代柱神が輩出されたとき、玉座に誘惑を感じたとしても、それを実現できると周囲に思われるだけの力を持つ一族なのだ。

『だから、お前が候補に選ばれちまったのは、最悪の筋書きのひとつだったんだよ』

ギスカリールにそう告げられたとき、アマンシールは反駁した。

『父も兄たちも、そんなつもりは毛頭ありません！』

しかし、返ってきた冷ややかな応えに、背筋に冷たいものがつたうのを感じたのも事実。

『本人たちがどんなつもりだろうと、この場合、あまり関係がないんだよ。いまの王家のせいで冷や飯を食らわされてきた連中は、こぞって動きを見せるだろう……逆に王家の庇護を受けて、これまでぬくぬくと恩寵を受けてきたやつらもな……まあ、目

的は真逆だろうが、ファラスース家が困った立場に追い込まれることは確実だろう』

ギスカリールの言葉には、遠慮や容赦というものが一切なかった。

つまり、王家に不満を抱く勢力は、勝手にファラスースのための不穏な申し出をして来かねないわけで、王家よりの面々は、ファラスースを追い落とす策略を練るかもしれないということだ――実に迷惑なことに、こちらの言い分など聞きもせずに。

『すごく、迷惑ですね』

『まあな。それでも、お前が候補に挙がっただけのことなら、侯爵もここまで捨て身な策は取らなかっただろうよ。よりにもよって、第二候補がマルシアス家の子息じゃなかったら……な』

第二候補――とは、初めて耳にした情報だった。

では、自分になにかがあったとしたら、神宝に選ばれるのは、多大に問題のあるマルシアス家の少年となるわけなのか。

（……それは、まずい）

反射的に、アマンシールは思った。

経験がものを言う政治の世界において、学び始めて四年弱でしかないアマンシールの知識は実際の場においては、あまり役には立たない代物でしかない。

それでも……そんな若輩者の身でも、マルシアス家が長年に渡り、他国と気脈を通じていることぐらいは知っているのだ。

エルスース王家に重きを置いていないマルシアス家にとって、柱神交代を境に王家の交代を行うことに迷いはないだろう——だが、かろうじての王家の縁戚に過ぎないマルシアス家が王家となることは、王朝交代ではなく、簒奪に限りなく近い行為と諸外国から見なされてしまう。

ディエーンという国の名は、変わらず継がれることになろうとも、新たに立つのがマルシアス家では、ディエーンはディエーンと見なされない。

なぜなら、マルシアス家の代々の当主には、ディエーンの始祖の血が、杳として流れていないからだ。

どれほど薄まろうと、連綿と信じられ続けてきた、ディエーン開祖の血族は、マルシアス家とは交わっていないのだ——傍流の縁戚の娘を養女に迎え、嫁がせたがため



に。

『マルシアス家だって、馬鹿じゃない。そのぐらいのからくりは見抜いているだろう……だが、外聞的には……どちらかと言えば王家のそれだが、いまさら明らかにできないだろうってこともわかってる』

つまり、とギスカリールは言った。

『お前は、導火線であると同時に、殺されないことで、マルシアスに対する最大の歯止めなんだ。だけど、クラン嬢もまた、王家にとっては決して手放せない重要な切り札であることも承知しておけよ？　ディエーンの王妹と、ルーシアルの当代柱神との間に生まれた娘である彼女なら、婿の来手なぞ腐るほどあるんだ。国王も王太子も、なるべくそんな風には、彼女のことを利用したくないと思っていたんだろう……だが、こうなっては是非もない。彼らは有効にクラン嬢を利用するための算段をするだろう。お前に残された道はふたつにひとつだ。ディエーンの将来のために、全部ひっくるめて諦めるか、全部投げ打ってあの子と一緒に逃げるか。ああ、逃げる道を選ぶつもりなら、例のセディシャんとこから問題のブツ、かっさらっておかないとなー』

涼しい顔をして、剣呑(けんのん)この上ない言葉を発した青年は、こちらのぐるぐる状態にある頭の中身など斟酌(しんしゃく)もなしに、無情にも問いかけてくれたのだ。

『で、どうする？』

と――。

35

寝台からそっと起きあがり、クランクレイアは窓の外を見つめる。
空には銀色の月が浮かんでいた。
それを見つめながら、クランクレイアはさまざまな……いろいろなことを考える。
（アマンシールは、次代の柱神に選ばれた……）
他でもないギスカリールに告げられたことによって、クランクレイアはそれが真実であることを認識した。
でも、それに自分はどう対応したらいいのか……？
ギスカリールは、いろいろなことを、過剰なまでに言い置いて行ってくれた。
混乱し、迷ってしまうのはそのせいだ。

一番の衝撃は、やはりアマンシールがひとならぬ存在になってしまうということだった。

柱神とは、天と地との間――『空』を支える神の眷族。

それは、人間として当たり前に感じる、時間というものから切り離された存在を意味する。元々が初老にさしかかったころに、柱神に選ばれたというコーランジュのことしか知らなかったなら、その事実にさほどの違和感を覚えずにすんだかもしれないが、実の父であるクアン・クランドの姿を目にしてしまったいまでは、それはもう無理だ。

とうに三十路をすぎているはずの父は、二十歳前後にしか見えない姿の主だった。そしてその若々しい姿のまま、この先二世紀ほどの時間を過ごすのだ――血の繋がった家族が老い、やがては天寿を全うしようとも……いや、その子供たちや下手をすれば孫たちの死を見送ることになろうとも。

そう想像するだけで、クランクレイアは心臓が凍り付くような思いに囚われる。

必ず、取り残されてしまう運命――そして、必ず取り残して去ってしまう運命。

ひとの運命も似たようなもの——命の期限が約束された者などいない。けれど、柱神に限ってはそんな言葉は当てはまらない。なぜなら、彼らは神々自らが、天を支える者としての、揺るぎない天寿を与えたものなのだから。

アマンシールがそれに選ばれたのなら、彼の寿命も神々によって決められてしまったことになる。

ならば、自分は必ず、彼を残してこの世を去ってしまうのだ——柱神に変化する以前の父が設けた子供である自分は、あくまでひととしての時流のなかで生きていくことしかできないのだと、ギスカリールにはっきり告げられたのだから。

その上で、ギスカリールは難しい問いを投げかけてきた。

『そうだとして、君は彼の手を取りますか？』

と——。

意地の悪い問いだった。

けれど、即座に答えられなかったのも事実だった。

自分が必ず相手を置いて死んでしまうとわかっている状況で、どうして簡単にその

手を取れるというのだろう。喪失の痛みを与えると、わかりきった上で、どうして共にいたいなどと言えるだろう？

けれど――。

もし、自分がその手を取らなかったら……その果てに、彼が別の女性に手を差し出したら？　そのことを思うだけで、胸をかきむしられるような痛みを覚えるのも事実なのだ。

抱きしめられた腕の感触と、その温もりは忘れられるものではない。

そっとふれあうように交わした口づけの感触も――あれが、他人も知るものとなることだけは許せないとも思ってしまう。

（わたしは……なんて、欲深いんだろう……！）

アマンシールの手を取った場合、必ず先に死ぬとわかっているのに、なのに残る彼の時間まで、自分ひとりのものにしたいと願ってしまう。

「神の娘……だなんて、嘘っぱちだ……」

こんな利己的な、神の娘などいるはずがない。

「わたしという人間は、なんとどこまで……」

卑しいのか——という言葉を口にする寸前、クランクレイアは息を呑んだ。

それは、彼女の寝室の真下——ユーカリの若木のそばに、ぽうっと淡い金色の光が宿ったのを目にしたせいだった。

(なに……?)

鬼火とは違う、温かい光に包まれたそれの正体を見極めるため、目を細めた彼女は、それがなんであるかに気づいた途端、紫水晶の双眸を大きく瞠らせた。

そこに——いたのは。

ユーカリの若木に寄り添うように、たたずんでいる、その姿は——。

「……ジェス……っっ!?」

小さく叫び、彼女は駆けだした。

あり得ぬことだとは、彼女はかけらも考えなかったのだ——。

アマンシールは夢をみていた。

少なくとも、彼にとって、それは夢でしかなかった——というか、他に考えられなかったのだ。

（あれぇ……？）

見慣れた王宮の庭の一画にたたずんでいる自分に気づいたとき、彼は首をかしげ、小さく苦笑した。

（会いたいって思ったから、王宮の夢見るのはわかるとして……なんで、クランさまの寝室の下、かなあ……？　せっかくの夢なんだから、クランさまと一緒（いっしょ）にいるのが良かったのに）

しかも、周囲はなぜか夜——空に浮かぶ月の位置から察するだに、夜半近い。

こんな時刻に王宮を訪れたことは一度としてなかったから、彼は少しばかり、自分を後ろめたく思った——夜半過ぎに、恋人の寝室の下に立つ夢を見るほどに、自分は彼女に焦がれていたのか、と。その奥に存在する思いは、純粋なだけの思慕（しぼ）とは思え

なかったから。

まだ幼さの方が勝る彼女に、触れるつもりはなかった——ゆっくりとゆっくりと、時間をかけて、互いの思いを育てて行くつもりだった。思いがけない出来事の連続で、そんな穏やかな時間は許されないのだとわかってしまったけれど、自分がこんな夢を見るほどに、彼女に触れたがっているとは思ってもみなかった。

（でも、まあ……寝室に乱入なんて、恐ろしい夢じゃない分、まだましっていうか……でも、どうせなら、昼間、中庭で彼女と和気藹々とお茶してる夢のほうがよかったなぁ……）

少なくとも、それならクランクレイアの顔を目にすることができる。

美味しい茶と菓子をつまみながら、笑いながらいろいろな話をして、遊戯盤で勝負して……現実には、そんな時間を持てなくなって久しいから、是非とも夢でなりと追体験してみたかったのに……。

などと、埒もないことを考えていたアマンシールは、近づいてくる気配に気づき、（まさか）と思った。

夢は願望を映す鏡だと言われる。
もしそうなら――近づいてくる気配の主は、たったひとりしか考えられないではないか。
はたして、振り返った彼の目に映ったのは、夜着の上に、薄手の上着を羽織っただけのクランクレイアが駆け寄ってくる姿だった。
（わたしというやつは……）
自覚のない助平だったのかと、内心頭を抱えたものの、久しぶりに見るクランクレイアの顔に、つい口元が緩んでしまった。
月の光が照らす庭を、薄絹の裾を翻して、クランクレイアが駆け寄ってくる。
少し大人びたように見えるのは、自分の多大なる願望と、想像力の賜に違いない。
少なくとも、こうした色っぽい場面に、現実の彼女はまだそぐわないだろうから。
（待つのは苦痛じゃない……って、思ってたんだけど、本当は待ちたくなんてなかったのかな……わたしは）
それとも――。

（周囲の状況が変わりすぎたせいで、焦ったんだろうか……？）

どちらも、ありえそうなことに思えた。

自分が次代柱神の筆頭候補に選ばれたことで、ふたりを取り巻く状況は、まったくといっていいほどに変わってしまった。

彼女のことを考えれば考えるだけ、怯む心が生じてきた。

彼女に苦労を味わわせたくない。彼女を苦しめたくない――国王や王太子を裏切るような真似は決してさせたくない、と。

だから、ギスカリールやハーリクに何度勧められても、『駆け落ち』の一件は保留にしつづけてきた……決断を、彼女に委ねるということは、同時に彼女に逃げ場のない重荷を背負わせることに他ならないと思ったからこそ。

（なのに……夢の……心の、なんと正直なことだろう……!?）

駆け寄ってくる、クランクレイアの姿を目にした途端、アマンシールはそんなものは、ただのおためごかしに過ぎなかったことを思い知らされた。

（このまま、攫ってしまいたい……！）

胸の奥が、どくりと熱く脈打ち、そうせずにはいられないほどの望みが全身から噴き出してくる。

こんな激しい嵐が、自分のなかにあったとは、思いもかけないことだった。

（……夢で、よかった……）

これが現実であったなら、きっと自分は、彼女がなんと言おうと、腕にその体を抱きしめた瞬間、有無を言わさず攫うに違いないのだから。

ここで、アマンシールは思いきり、開き直った。

夢という免罪符をいいことに、現実では決して口にだせなかったろう……いや、出せたとしても、相当に遠回しにしか言えなかっただろう言葉を、ずばりと言い切ったのだ。

「クランさま。わたしと駆け落ちして下さいませんか？」

と――。

紫水晶の瞳を持つ少女は、しかし夢の中とはいえ、彼の願望を素直に聞き届けてはくれなかった。

「はあ？」

なにを言っているのか――と言わんばかりの顔で、声を上げた少女は、次の瞬間、平手でアマンシールの左頬（ひだりほほ）を、ぺちん、と叩いたのである。

夢は心の奥底を映す鏡――。

どれほど押し殺そうとも、殺しきれない思いや願いが、夢のなかでは解放される。

だから、夢のなかにも拘（かか）わらず、クランクレイアが「なにを言っているのだ、そなたは？」と返してきたとき、アマンシールは思わず苦笑したのだ。

（夢のなかでぐらい、うなずいてくれるかも……とか思ってたのに……）

夢のなかでも、クランクレイアはクランクレイアのままだった。

自分の望み通りの答えをたやすくはくれないのだ――それは、本当には、自分が彼女に同意してもらいたくないと思っているからなのか、それとも夢のなかでさえ、彼

女らしからぬ言動を取らせられないほどに、彼女のことを理解しているということなのか……。

恐らくは後者だと、アマンシールは思った。

（ということは……甘い夢さえ見られないってことか……？）

なんだか、少しだけもの悲しくなったが、あまりに甘すぎる夢でも見た場合、目覚めたときの空虚感は相当なものがあるだろうことに気づき、（まあ、いいか）と思った。

予行練習だと思えばいいのだと、心を切り替え、彼はまだ幼さの残る恋人に向き合った。

「……わたしと駆け落ちするのはおいやですか？」

真摯な口調で問いかけたが、クランクレイアはどこまでも予想外の反応を示してくれる。

「そんなことはどうでもいい！　そなたは……そなたというやつは、いったい全体、なんだってこんな真似をしたんだ!?」

もの凄い勢いで怒鳴りつけられた。

（そんなことって……）

一大決心しての申し出を、一言のもとに切り捨てられ、アマンシールはけっこう……かなり傷ついた。

夢の中でもクランクレイアはクランクレイア――というより、夢の中の彼女のほうが、容赦がない上に理解不能だった。

「……クランさま。わたしは本気で尋ねているんですが……」

どうでもいい、は酷いでしょう――ぼやいた彼に、紫水晶の瞳の少女は真面目な顔で反論してきた。

「わたしだって大まじめだ。寝ぼけるにしても、タチが悪すぎる。なんの心得もないままに、魂だけを空にとばすとは、無茶が過ぎるというものだ！　そんな恐ろしい真似、わたしだって試したこともないぞ!?」

……なにを言われているのか、アマンシールにはわからなかった。

なんだか、頭がうまく働いてくれないのだ。

ただ、魂だけを空に飛ばす——というのは理解できた。
「馬鹿なことを……そんなことは、神殿でも高位の御方にしかできないことでしょう？　わたしにできるはずがありません」
はっきりきっぱり否定した瞬間、クランクレイアが鬼気迫る形相で見上げてきた。
「できるはずのないことをやっておるから、問題じゃと言うておる！　戻れなくなったらどうするんだ、一刻も早く体に戻るのじゃ！」
「そんなことを言われても……」
大体、気がついたらここにいたのだ——戻れと言われても、その方法などわからない。
第一、魂とは、肉体と違い、触れることのできない存在ではないのか。だとしたら、出会い頭にぺちんと叩かれた、あれはなんだったというのか。
（それとも、精霊たちと親しく交わってらっしゃるクランさまなら、実体のない相手でも関係なく触れるのかな……？）
と、思ったときのこと——視界の隅を過る、白い、人影のようなものに気づいた。

なんだ、と目をこらしたら、それは正しく人影で——けれど人間ではない存在の姿だった。

髪も瞳も肌も純白であるだけでも、人間とは思えないのだが、何より、彼らの髪も四肢も宙に溶けこんでいた。

（……まさか、これが……）

「風霊……？」

つぶやいたアマンシールに、クランクレイアが呆れたような目を向けていた。

「いまごろ気づいたのか、この馬鹿者が。大体、夢とうつつの区別が出来ぬというのが間違っておる。わかったら、早々に帰れ。いかに彼らが気遣ってくれているとはいえ、魂だけがうろついてていいわけがない。戻る体がなくなったらどうするつもりじゃ」

（間違ってると言われても、普通こんなことを現実だなんて認識できないって……）

と、そこまで考えたとき、アマンシールははたと気づいた。

「……うつつ……？」

クランクレイアの眦（まなじり）が、これ以上はないというほどにつり上がったのは、その刹那（せつな）のことだった。

「どこまで寝ぼけておるのじゃ！　もう、いい！　風霊たち、面倒をかけるが、この馬鹿者を早々に体に戻してやってくれ！」

問答無用だった。

「え!?　いえ、これが現実ならなおのこと……」

話したいことがあるのだと……言う間もなく、アマンシールの意識体――としか言いようがない――は、周囲にいた風霊たちにがっちりと捕まってしまった。

「え、え、え……だから、ちょっと……っっっ！」

待ってくれ！

最後まで言うことすら許されずに、彼はその場から連れ出された。

王宮がどんどん小さくなり、王都の街を照らす灯りを足下に認めた瞬間、アマンシールは自分が空を飛んでいることを知った。

そして、数瞬の後、彼は自宅の寝室の上で、ぱちりと目を開くこととなったのだ。

夢としか思えなかったが、そうとも言い切れぬものを感じ、彼は寝台に身を起こすと、思わず両手をわきわきと動かしていた。心なしか、悴んだように動かしにくく感じられて、先ほどのクランクレイアの言葉を思い出した。

戻る体がなくなったらどうするつもりじゃ！

それはつまり、魂が脱けた肉体は、生きるための動きをしなくなるということなのだろうか——いや、それではすぐに死んでしまうわけだから、もしかしたら、極端にその活動が低下するということかもしれない。

だとすれば、クランクレイアがあれほどに慌て、急いで自分を帰そうとしたことも得心できる……できるのだ、が。

「あれが現実だったのなら……はっきり言って、千載一遇の好機だったのに……」

刺客に狙われることなく、彼女とふたりきりで、会える機会など、肉体を伴っていては作ろうとしても無理なのだから。

自分がいかに危険な状況にあったのか、専門的知識のないアマンシールは把握できないまま、暢気にもその好機を生かせなかった事実を悔しがった。

（現実だとわかっていたら、あんな唐突な切り出し方なんか選ばなかったし、きちんと説明した上で、クランさまに答えていただけたかもしれないのに……）

昔から言われる通り、後悔は先に立ってはくれないのだ。

「う――っっ。やり方覚えてたら、もう一度挑戦もできるけど……なにをどうしたかなんて覚えてないし……第一、クランさまのあの剣幕だと、話聞いてもらうより先に追い返されそうだし……」

だったら、やはり、最初の予定通り、ギスカリールに骨を折ってもらって、手紙と伝言を届けてもらうしかないか――と、ため息まじりにアマンシールが考えたときのことである。

くすくすと、誰かが笑う気配を感じた。

しかも、室内で。

「へ？」

間抜けな声をあげ、気配のしたほうに顔を向けたアマンシールは、先ほどの一件が、まぎれもない現実であったことを、今度こそ認識した。

白い、白い――どこまでも白い、風霊の姿が、そこにあったのだ……。

アマンシールの魂が、風霊たちにがっちり羽交い締めにされたまま、空高く遠ざかっていくのを見送った後、クランクレイアは盛大に安堵の息をついた。

「……ったく、なにを考えておるのじゃ、あやつは」

つぶやいてすぐに、恐らくなにも考えてはいなかっただろうことに思い至り、黒髪の王女は右手で左の胸を押さえた。

そう……修行を積んだわけでもない人間が、なにか考えて、魂だけで空を駆けることなどあり得ない。

人間の肉体と魂は、分かちがたく繋がり、それぞれが支え合って『生』を紡いでいるものなのだから。

分かつべく修行を積んだ者ならともかく、当たり前の人間が、それを可能とするの

は、死あるいはその間際に立ったときだけだ。
アマンシールが、そのどちらでもなかったことはわかっている。
彼は死霊ではなかったし、冥の気配も纏っていなかった。
そのことに大きな安堵を覚えたのは確かだったけれど、そのことの意味することに、クランクレイアは泣きたくなった。
当たり前のひとにはできぬことを、易々と修行もせずに成し遂げてしまうこと——それは俗に天才の業と呼ばれる。
けれど、クランクレイアは知っているのだ、アマンシールが決してその方面において、天才などと呼ばれるような資質の持ち主ではなかったことを。どちらかと言えば、鈍いほうに属していたことを。
なかった。いた。
そう——それはすでに過去のこと。
自らの身に起こったことを、夢だと信じて疑わないあたり、認識はまだついて行っていないようだけれど。

アマンシールは、明らかに変化しつつあるのだ——ひとならぬ存在に近しいものへと。

ギスカリールの言葉を疑ってなどいなかった。

アマンシールが、自分が『ジェス』と呼ぶあの青年が、次代の柱神（ちゅうしん）の最有力候補に選ばれたのだということを。

それでも、一縷（いちる）の望みは捨てきれずにいたのだ。

最有力候補だからといって、必ず彼が選ばれるわけではないのだ、と。

選定者とは、神宝（しんぽう）の放つ波長に最も敏感に反応する者だけれど、過去、第二第三の候補を神宝が選んだことがなかったわけでもないことを、精霊たちから聞かされていたからだ。

けれど——アマンシールが見せた、あの変化。

すでに、ひとならぬ身への変化の準備を、彼の肉体と魂が、勝手に始めているとしか思えない……あの。

「……ジェス……」

信じていた未来が、遠ざかっていく……。
そして新たに現れた未来は、麻のごとく乱れ、どれに手をのばしていいのかもわからない。
クランクレイアはひとり立ちつくし、夜空を見上げた。
そんな自らを見つめる視線があることに、ついに彼女は気づかなかった——。

36

ウァランセイド・セディシャは、苦虫を噛みつぶしたような顔で、客人と相対していた。

決して気むずかしいタチではない彼だったが、ここ最近、ほとんどひっきりなしといっていいほどに訪れる客たちのせいで、眉間の縦皺が定着しつつあった。

「……何度お訊ねされようと、お答えすることはできません」

来る客、来る客に、毎回何度となく繰り返すことになって久しい台詞を口にしつつ、ウァランセイドは不遜とは思いつつ、自分をこんな役目に選んだ創世七虹神に少なからぬ不満を覚えた。

選定者――それは、新たな柱神を、曇りなき目で見定め、選ぶ役目を受けた者。

俗世の利権に関わりなく、まさしく柱神の半身とも呼べる神宝の選択をともに感じ取り、選ばれた者の手にそれを委ねる、神聖にして名誉ある役。

同時に、それ以外の報酬のない役でもあった。

選定者は、その役目に対して、なんら保証されてはいない。役目を無事に終えた彼らの手に残るものは、彼らの苦労を労うような、温かい笑みをたたえた虹神の顔が刻まれた、現実には鋳造されていない神聖硬貨一枚だ。

だが、それこそがなによりの宝であることも事実だった。それを得た者は、生涯虹神の加護を与えられ、死後までもその祝福を約束されるのだから。

そのために、求められるのは、俗世の利害に惑わされぬ意志の強さだった。

暗黒時代、ひとびとは自分たちに都合のいい柱神を誕生させるために、神宝の意志を無視して策動した。

結果、神宝の半数近くが歪み、永遠に失われてしまった。

残された神宝は、かつての三分の二にも届かない。

だからこそ、創世七虹神は、それまではなかった『選定者』という役目を設けたの

だ。

私利に走ることなく、厳正に新たなる柱神を見極めるために。

だが、その機構が正常に働いたのは、始まって二世紀ほどでしかなかった。

柱神が、天から降臨するのではなく、人間から生まれ変わるものであることを知る者たちが、こぞって自分の縁者、あるいは友好的な知り合いである候補を、選んでくれるように選定者に詰め寄るようになったからだ。

ある者は甘い言葉で、またある者は選定者やその家族の身を脅かすことで、彼らは自分にとって都合のいい柱神の誕生を計ろうとした。

どれほど、選定者が、候補と見なした者たちのことを隠そうとしても無駄だった。

少なくとも、柱神を国の守護神と捉える土地柄においては。

(それは……つまりは、こういうことだったのだ……)

洩らした覚えのない候補の親族の訪問を受けた、ウァランセイドはうんざりしつつ、内心ため息をついた。

今回の、ディエーンにおける柱神交代劇——当代柱神コーランジュも、各神殿最高

司祭も、もちろん自分も、事態が動き始めたとき、沈黙の誓いを立てた。
決してこの事実が外に洩れることがないように、と――かつて、洩れてしまったがゆえに、血なまぐさい事件が起こったことは、神殿関係者にあっては暗黙のこととされていたからだ。
だが、そこまでしたにも拘わらず、ウァランセイドの屋敷には、次代候補として彼が挙げた五人中、四人の親族が日参してくるのだ。
沈黙の誓いは、虹神自らにかけたもの――自分も含め、その誓いを口にした者が破ったとは考えにくい。
だとしたら……だ。
ほかに、考えられる可能性は。
（神殿内部に浸透した、各家の情報網しかないのではないか……？）
思い至った瞬間には、即座に否定した考えだった。
誰より神々に忠実であるはずの神殿の住人が、そのような俗事のために動くなどとは想像もしなかった……というより、考えたくなかったのだ。

だが、あれほどに秘密裏にことを運ぼうとしたにも拘わらず、ウァランセイドの元には、かれが次代候補に挙げた人物に縁のある者たちばかりが訪ねてくる。

しかも、彼らの口にする言葉は、言い回しこそ違えど、ほとんど同じだったのだ。

いま、目前にいる客人もまた――。

「あなたが神より下された、尊いお役目について、口出ししようなどとは思ってもおりません。ですが、あなたもご存じの通り、過去このディエーンでは、次代さまが交代する度に、悲しい歴史を紡いで参りました。此度こそ、その悲しき連鎖を断ち切りたいと、わが主は思っております。その主の心を、どうかくみ取ってはいただけませんでしょうか？」

文句のつけようのない申し出ではあったが、ウァランセイドには頷くことができなかった。

どんな事情があれ、神宝の意志を本人とその近しい親族以外に告げることは禁忌とされていたからだ。

客人が、隠しながら放っている殺気に気づいていなかったわけではない。

剣技に詳しいわけではなかったが、それでも肌を突き刺すようなあからさまなそれに気づかずにいられるほど鈍感ではなかったというだけのことだ。

「なんと仰られても、お断りするほかありませんな」

答えた瞬間、肌を突き刺す殺気はいや増した。

（ここまでか……）

これもまた運命なのだろう――ウァランセイドは自身に言い聞かせて、ふう、と息をついた。

「なんと仰られようと、至高の方々より下された役目なれば、この身が塵と化そうとも、その内容に関するお訊ねには答えられませんな」

毅然として言い切った彼の目前で、客人は音も立てずに立ち上がり、すらりと腰の剣を抜いた。

「どうあっても、次代さまがどなたになるのかは口に出来ぬ、と？」

白刃が、ウァランセイドの首筋につきつけられた。

脅しではないことを、皮膚で感じながら、彼は応じた。

「心を裏切れば、なおさらに辛い日々が待つばかりでございますからねえ」
「……致し方ない」
残念そうな声でそう告げ、男は刃を一閃した。
ぷつり、とウァランセイドの首筋の血管が断ち切られた。
それが、次代柱神の選定のために選ばれたウァランセイド・セディシャの最期だった。

「なに？　風霊が見えるようになったぁ……？」
とんでもないアマンシールの告白に、まだ一日の大半を寝台に縛り付けられているハーリクは目を丸くした。
「うん。おまけに話せるようにもなっちゃって」
「いつ」

「昨日の夜」

そうして、アマンシールは親友に昨夜の出来事を打ち明けた。

一通り聞き終えたハーリクは、難しい顔になって口を開いた。

「なあ、そういうの、確か幽体離脱って言うんだよな？　おれの聞いた話じゃ、死にかけたやつがよく体験するらしいけど……お前まさか、昨日死にかかったりはしなかったよな？」

疑わしげな目を向けられ、アマンシールは肩をすくめた。

「だったら、いまごろここにいないって。あ、ただ体を留守にしすぎたら、そのまま死んじゃうこともあるってことだから、死にかけたといえば死にかけたのかな……？」

なんとも暢気な答えに、ハーリクがぴくりと眉を震わせた。

「……クランクレイアさまが、慌てて追い返すわけだ。でも、死にかけたってんなら、おれも死にかけたけど、そういう不思議体験はしなかったなぁ。どうせなら、花畑より、そっちのほうが面白そうなのに……」

いかにも残念――と言いたげな親友に、今度はアマンシールが顔を曇らせる番だった。

「ハーリク、それって笑えない」

「いやー、だってよ。空飛んで、好きなとこに行けて、おまけに精霊まで見えるようになるだなんて、そっちの方が断然得じゃないか。あ、もしかして、いまも近くにいたりするのか？」

なにが？　――もちろん、風霊がである。

「窓開けたら入って来てくれるかも知れないけど……基本的に、閉じた場所には入りたくないんだって」

そう――昨夜、肉体に戻ったアマンシールは、そばにいた風霊から、いろいろなことを聞き出していた。

もっとも、気まぐれで移り気な風霊は、すぐに興味をよそに移すので、欲しい情報を引き出すのには思った以上に時間がかかったのだが。

「ふうん。ま、水も空気も、流れないと淀むからな。でも、良かったじゃないか。風

霊とお近づきになれたのなら、これからクランクレイアさまに会いに行き放題じゃん？　さすがに昼間っからは人目があるから無理としても、夜半とかなら、誰にも気づかれないだろうし」

ハーリクの言わんとするところを察し、アマンシールは苦笑した。

「駄目だって。そんな夜更けに、生身のわたしがクランさまの寝室の下になんかいるのが見つかったら、大騒ぎになるじゃないか。それに、クランさまにはさんざん、危ないから風霊に頼んで空を飛ぶのはやめてくださいって言ってたわたしがそれをやったら、あの方は絶対、絶対大激怒なさるに決まってる」

この言葉には――特に後半部に――大いに説得力を感じたらしいハーリクは、「うーん」と唸った。

「確かに。聞いてる限りのクランクレイアさまの性格なら、それなら自分が飛んでくるとか言い出しかねないよなー」

赤毛の少年の的確な指摘に、アマンシールは内心舌を巻いた。

言い出しかねない――どころか、十中八九、やる。絶対やる。

とてもではないが、そんなことはさせられないので、アマンシールは別の方法を模索することにしたのだ。

「うん。だから、やっぱり意識だけ抜け出してって方法が一番無難かな、と」

「どこが無難なんだよ、どこが！　第一、同じことしたって、またクランクレイアさまに追い返されるのがオチだろうが」

馬鹿も休み休み言え――怒った声には、けれど自分を心配してくれている響きが感じ取れて、なんとなく心の奥が温かくなった。

この親友は、本当にやさしい。先ほどの臨死体験談にしたところで、いつまでも過ぎたことを気に病むな、とわざと軽い口調で話してくれたことを、アマンシールは知っている。

そんな友人に、またしても甘えることになってしまうが……ほかに適任者がいないのだから仕方ない。

勘弁してもらおう、と彼は「それが、大丈夫なんだ」と告げた。

「風霊たちに、教えてもらったんだ。確かに昨日みたいに、何の準備のなしにふらふ

らしたら危険らしいんだけど、きちんと備えをしたら、そう危険なことはないんだって」

安心させるように、明るく言い切った彼に、しかしハーリクは納得してはくれなかった。

「準備？　儀式用の香とか呪いの陣とか描くってのか？　そりゃあ、お前の二番目の兄貴さんは神殿にいたから、そういうことに詳しいかも知れないけどよ、素人の生兵法が、どんなに危険かぐらいはおれだって知ってるぞ。到底賛成できないね」

はっきりきっぱり言い切られたが、アマンシールはもちろん、そんなことで諦めはしなかった。

「違うんだって。要は、空になった体についててくれるひとがいたら大丈夫なんだって。風霊たちは、人間の体温のように微妙な温度ってよくわからないそうなんだ。だから、風霊がそばにいても、どれぐらい体温が下がったらまずいのかとか、判断できないんだけど、別にもうひとり、人間がそばにいて、脈とか体温に気を配ってくれてたら……それで、そろそろ危険だって教えてもらったら、すぐに王宮に連れ戻しに来

てくれるって……」

だから、本当に心配ないのだ――と言いかけたアマンシールは、じっとりとした目で自分を見つめてくるハーリクの、剣呑な眼差しに言葉を呑み込んだ。

「……つまり、お前は最初から、おれがなにを言おうが、やることに決めてたってことだな？　風霊たちとも打ち合わせずみで、おれには結果だけ伝えたあげく、さらには図々しくもお前の体のお守りをさせるつもりなんだな？」

気のせいだろうか……声がどんどん低くなっていく。

それと同時に、ハーリクを取り巻く空気が、どんどろしたものに変化していた。

さすがに先走りすぎたかと思ったが、後の祭りというものだ。

次の瞬間、アマンシールは頬を引っぱたかれていた。

「こぉのぉ馬鹿たれがぁぁっっっ！　いくら風霊が嘘をつかないからって、鵜呑みにする馬鹿がどこにいる!?　精霊にとって安全なことが、人間にとっても安全かどうかなんてわからないだろうがっっ！　そんなことにも思い至れないほど、お前は頭が悪いのか!?」

……もの凄い大喝声だった。

寝台のそばに座っていたアマンシールは、ほとんど耳元で発されたその声のせいで、頭がわんわんした。

「ハ、ハーリク……」

「ちっとは頭を働かせろ。これが、何度も学年主席になったやつだってんだから……ったく、もう。お前に負けたやつらが聞いたら、涙流して悔しがるぞ」

いちいちごもっともな指摘に、さすがにアマンシールも返す言葉がなかった。

本当に……ハーリクの言うとおりなのだ。それでも突っ走ろうとしたのは、胸の奥の不安と焦りが、刻一刻と大きく育っていくからだ。

クランクレイアを、失いたくない。彼女とともに人生を歩いていきたい。そのためなら、どんな無茶だってやってのける――。

けれど、それは周囲で自分のことを心配してくれているひとたちの心を踏みにじるも同じことなのだ。

怒鳴りつけられて、ようやくそのことに気づいた。

「……ごめん」

心から謝った彼に、ハーリクは冷ややかに「少しは頭が冷えたか」と問うてきた。

「冷えた」

答えるアマンシールを、ハーリクはなんとも複雑そうな顔で見つめた後、唐突に「ほら」と右手を差し出してきた。

（……握手？）

思わず右手を差しだそうとした彼は、またしても親友に怒鳴りつけられた。

「誰が握手を求めてるんだ！　いいから、あの文鎮っていうか、鏡出せ」

「あ。今日は部屋に……」

置いてきたままだと答えると、すぐに「取ってこい」と言われた。

「その手のことに関したら、絶対お前の兄貴さんより、ギスカリールさんのほうが詳しいだろうが。知識持ってるひとに聞かないで、誰に聞くんだよ？」

ほとほと呆れ果てた口調で告げられた言葉に、アマンシールはぽん、と手を打った。

「そ、そうか……」
「……お前、なあ……」
ハーリクの声には、色濃い疲労がにじんでいた。
「と、取ってくる」
椅子から立ち上がり、アマンシールは扉へと歩き出した。
その背中に、ハーリクの声が飛んでくる。
「おう。それで、もしギスカリールさんが、その方法なら大丈夫って保証してくれたら、寝ずの番して、お前の体見ていてやるよ」
大きくはない声は、けれどしっかりとアマンシールの耳に届いた。
「……ありがとう」
と、彼はつぶやいた——涙が、出そうなくらいに嬉しかった。

神殿からもたらされた知らせに、ファラスース侯爵リュシアンドは、全身から血の気がひくのを感じた。

それは、懸念していたなかでも、最悪の事態を告げるものだった。

「マルシアス家の子息に続いて、今度はセディシャ氏、ですか……」

常に軽い口調と態度を崩さない、次男のファバルワースの声も、さすがに固くなっていた。

アマンシールとともに、次代候補に挙げられていたマルシアス家の子息ファリネスが、昨日の朝、床で冷たくなって発見された情報を、彼らは秘密裏に手に入れたばかりだった。

外傷はないものの、持病もなかったその青年の死には、不穏な影がつきまとっており、ファラスース家の当主とその息子ふたりは、これからの対応に頭を痛めていた。

その矢先に、今度は選定者であるウァランセイド・セディシャが、自宅で何者かに殺害されるという凶報が舞い込んだのだ。

黄神神殿最高司祭グラスパード直筆の手紙には、くれぐれもアマンシールの身辺に

気をつけるようにと綴られていた。
すでに一度、アマンシールには刺客の手がのびている――そして、今回のふたりの人物の死……次代柱神を巡っての、血なまぐさい企みが、何者かによって進められていることは、もはや疑うべくもない。
最も疑わしいのは、他の候補者の家族や親族と言えるが、問題なのは、残った候補者全員の周囲が、その可能性を頭に入れているということだ。
候補が減れば、選ばれる可能性が高くなる――そのことに、いまさらながらに気づいた者もいるに違いない。また、これまでそのことに気がついてはいても、神々の怒りを恐れ、二の足を踏んでいた者が、歯止めを失い、禁断の一歩を踏み出す危険性も高くなったと言える。
「選定者まで手にかけるとは……最早なりふり構ってませんね」
長子チェルギースの言葉に、リュシアンドは眉間の皺を深くした。
「ここまで瀆神的な行為に手を染めるとは……」
「地獄には、自分ひとりが堕ちればいいと、思っているのかもしれませんね。なんと

も見上げた精神力だ」

「「ファバルワース！」」

不謹慎な発言に、リュシアンドとチェルギースの叱責の声が重なる。

さすがに自分でもまずいことを言った自覚があるのか、ファバルワースは神妙な顔で頭を下げた。

「申し訳ありません。ですが、相手がここまでやるとなると、うちの末っ子のことは、早急に対処しないとまずいでしょう。いや、もう……贄の宮ぐらいの扱いでは、安全とは言い切れないかもしれない……」

神罰をも恐れぬ覚悟で動いた人物である以上、国の安寧のための存在だという理由で、アマンシールに対して手控えるとは限らないのだから。

だとしたら――。

重い……重すぎる沈黙が、三人の上に落ちた。

ディエーンの安定を守り、ファラスース家を守り、数奇な運命に見舞われた末の侯子の安全と未来を守る――それを念頭に事態に対応してきた三人だった。

だが、もたらされた凶報によって、すべてを守ることは困難となった。
では、なにを最優先にすべきか――いや、切り捨てるなら、真っ先に選ぶのはなにか。
その場にいた全員が、同じ選択を抱えていることを、三人ともにわかっていた。
そして、恐らく導き出すであろう答えも、また同じであろう――と。
だから、誰も口を開かなかった……否、開けなかったのだ。

あとがき

こんにちは、前田珠子です。

『天を支える者　古懇唄（いにしえこいうた）』の第四巻をお届けいたします。

前回ようやくロマンスにたどり着いた私の今回の目標は、言うまでもなくドラマティック、でした。

次代さま候補に選ばれてしまったアマンシール――ようやく春が訪れたばかりだというのに、またしても難題山積み！

それでも負けずに、アマンシールとクランクレイアは互いに愛を育（はぐく）みつつ、過酷（かこく）な運命に立ち向かう――という、怒涛（どとう）の展開を予定していたのですが……初期の段階で躓（つまずき）きました（泣）。

それというのも、この巻の最初のほうで起こった事件が元凶です。巻き込まれた親友くんと、アマンシールのシーンを書きながら、

「ああ、これがクラン相手だったら、立派なラブシーンにできたのに……」

と、ため息をつくことしきり。

ファラスースのやり手三人組が、あっという間に警備態勢整えてくれたものですから、主人公がほこほこ外出できなくなったのですね。

おかげで、今回、ふたりのツーショットが激減してしまいました。せっかく、三巻の感想のお手紙で「ようやく『古戀唄』のタイトルらしくなってきましたね♡」と言っていただけたばかりなのに……。

おまけに、ようやくたどりついた二人きりのシーンでも、しっかり者のヒロインが怒りっぱなしという始末……甘い空気はどこ？　ふたりは心を通い合わせた恋人同士のはずなのに、どうしてこんなに色気がないの？　と自分で書きながら唸ってしまいました。

とは言え、ドラマティックな展開にはなったと思っております——もしかしたら、

一部で「前田のキャラ虐めが再発したか……」と言われるかもしれませんが。

ところで、話は変わりますが、今回の執筆中、自分でもちょっとボケてるんじゃないのか——と疑う事態が発生しました。

我が家には猫がいるわけですが、彼らは時に天使、時に悪魔に変身します。なかでも困るのが、電気コードや電話線など、ビニール製の線を噛む癖であります。おそらくゴムゴムした噛み応えが気に入っているのでしょうが、言うまでもなく危険です。ですからコードのほとんどは、ガードカバーをつけているのですが……さすがにこれは大丈夫だろうと思って、そのままにしていたものがありました。

マウスです。

ノートパソコンならともかく、デスクトップのパソコンでは必要不可欠なこのマウスのコードが、ある日、被害にあって、ぷっつりと切れていたんです！

しかも時刻は午後八時過ぎ。早急に買いに走らなければ、今夜は仕事ができなくなってしまう——っと、慌てて最寄りの電器量販店へと自転車を走らせました。そこを除くと、マウス売ってる店が近くにないものだから必死でした。

そして閉店十分前、無事に店にたどりついたわたしは真っ青になりました。財布のなかに、夏目さんがひとりもいなかったんです。そういえば、夕方に新聞代と国営放送の受信料を払ったんだった——と、思い出しても後の祭りです。

しかも、財布ひとつポケットに突っ込んで飛び出してきたものだから、銀行のカードもない（以前、財布ごとカードを落として難儀して以来、財布とカードは別々にするようになったのが徒になりました）。取りに帰ってたら、確実に閉店してしまう……どうしようかと思ったわたしを救ってくれたのは、その店のポイントカードでした。最低限の機能のマウスなら買えるぐらいのポイントがたまっていたおかげで、なんとか無事、マウスを入手することができたわけです。

しかし、今振り返っても、あのときの衝撃はなまなかなものではありませんでした。どんなに焦っても、財布の中身を確かめずに、飛び出してはいけないということですね。

以来、マウスのコードにも、しっかりガードカバーを巻き付けましたが、念には念を入れて、今度予備のマウスも買っておくことにしました。

さてさて、着実に長くなっている『古戀唄』ですが、次回は！　次回こそはっっ！是非完結させたいと思っております。

またしても不吉な終わり方をしておりますが、どうかふたりの行く末を（国じゃないあたりが……）温かく見守ってやってください。あっと驚く新事実も、まだあれやこれやと残っておりますので、そちらもご期待ください。

今回の執筆にあたって、お世話になった関係者の方々、いつも美しいイラストを描いてくださる明咲トウルさま、そしていつも読んでくださる方々すべてに、心からの感謝を捧げさせていただきます――。

それでは、また次の作品で再会できることを祈りつつ……。

平成十八年　某月某日

前田珠子

※この作品はフィクションです。実在の人物・団体・事件などにはいっさい関係ありません。

まえだ・たまこ

1965年10月15日、佐賀県生まれ。天秤座のB型。『眠り姫の目覚める朝』で1987年第9回コバルト・ノベル大賞佳作入選。コバルト文庫に『破妖の剣』シリーズ、『カル・ランシィの女王』シリーズ、『聖獣』シリーズ、『聖石の使徒』シリーズ、『天を支える者』シリーズ、『ジェスの契約』『トラブル・コンビネーション』『陽影の舞姫』『女神さまのお気の向くまま』『万象の杖』『月下廃園』など多数の作品がある。興味を覚えたことには積極的だが、そうでない場合、横のものを縦にするのも面倒くさがる両極端な性格の持ち主。趣味と実益を兼ねてアロマテラピーに手を出したものの、今ではすっかり実益のほうが大きくなり、趣味とは言いがたくなりつつある。次こそは優雅な趣味を持ちたいと身の程知らずにも思っている。



天を支える者
古懇唄(いにしえうた) 4

COBALT-SERIES

2006年5月10日　第1刷発行

★定価はカバーに表示してあります

著者　前田珠子
発行者　片山道雄
発行所　株式会社集英社

〒101—8050
東京都千代田区一ツ橋2—5—10
(3230)6268(編集部)
電話　東京(3230)6393(販売部)
(3230)6080(読者係)

印刷所　大日本印刷株式会社

© TAMAKO MAEDA 2006　Printed in Japan
本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。
造本には十分注意しておりますが、乱丁・落丁（本のページ順序の間違いや抜け落ち）の場合はお取り替え致します。購入された書店名を明記して小社読者係宛にお送り下さい。
送料は小社負担でお取り替え致します。但し、古書店で購入したものについてはお取り替え出来ません。

ISBN4-08-600759-2 C0193

〈好評発売中〉 コバルト文庫

本好き少女の波乱万丈ファンタジー！

前田珠子 〈天を支える者〉シリーズ

イラスト／明咲トウル





- 天を支える者
- 天を支える者2
- 天を支える者 古戀唄（いにしえこいうた）
- 天を支える者 古戀唄（いにしえこいうた）2
- 天を支える者 古戀唄（いにしえこいうた）3

〈好評発売中〉 コバルト文庫

選ばれし子供たちが、世界を守る。

前田珠子 〈聖石の使徒〉シリーズ

イラスト／山本鳥尾

聖石の使徒
其は焔をまとう者

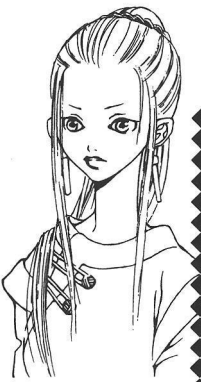
聖石の使徒
其は力を放つ者

聖石の使徒
其は天秤をかざす者Ⅰ・Ⅱ

聖石の使徒
其は水に遊ぶ者Ⅰ・Ⅱ

聖石の使徒
揺籃の瞳

聖石の使徒
蒼の組木箱





〈好評発売中〉 コバルト文庫

美少年コンビが暗躍する魔性を斬る!

前田珠子

〈魅魎暗躍譚〉シリーズ

イラスト／田村由美

魅魎暗躍譚 碧眼の少年(前編)(後編)

髪と瞳の色を奪った魔性を探す甲斐。途中、行き倒れの志摩を助けたことから、没落した名家の当主・隠岐と知り合って!?



月乃守家の姫君・遠江(とおとうみ)は美少女だが相当の猫かぶり。偶然異母兄の甲斐と再会を果たすが、魔性の陰謀が彼女に迫り…!?

魅魎暗躍譚 月読見の乙女(前編)(後編)

〈好評発売中〉 コバルト文庫

選ばれし少女よ、魔性に立ち向かえ！

前田珠子 〈破妖の剣〉シリーズ

イラスト／廈門 潤



漆黒の魔性
白焔の罠
柘榴の影
紫紺の糸（前編）（後編）
翡翠の夢1～5
鬱金の暁闇1～3
女妖の街 破妖の剣 外伝①
ささやきの行方 破妖の剣 外伝②
忘れえぬ夏 破妖の剣 外伝③
時の螺旋 破妖の剣 外伝④
魂が、引きよせる 破妖の剣 外伝⑤
呼ぶ声が聞こえる 破妖の剣 外伝⑥

コミック版 好評発売中

破妖刀・紅蓮姫を操る剣士ラスの
愛と闘い…大人気ファンタジー！

前田珠子/厦門 潤

破妖の剣
魔性降臨
白い焔に包まれて消えた街——その原因を探るラスと少年ザハトだったが!?



破妖の剣
紅の魔剣 碧の魔胎
最愛の使い手を失い暴走する紅蓮姫…。ラスと出逢う前の紅蓮姫の哀しい物語。



破妖の剣
深紫絃韻 1 2
魅縛師リーヴィの里帰りに同行したラスは、思いがけないピンチにおちいるが…!?



〈好評発売中〉 コバルト文庫

とびきり有能な人材、提供しますー。

イズァーカ商会へようこそ

前田珠子
イラスト／鈴木理華



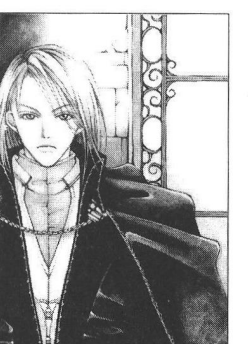
イズァーカ商会はどんな厄介事も引き受ける、世界最大にして唯一の人材派遣会社。特殊護衛課のカリンたちのもとには今日も物騒な依頼が舞い込んできて!?トラブルコメディ！

〈好評発売中〉 コバルト文庫

約束の庭でほほえむ、美しい妖魔。
華麗なる王国の幻想ファンタジー！

タラスタロスの庭

前田珠子
イラスト／木々



狂王カァスタイーンは残虐な殺戮の末、遂に広大な国タラスタロスを平定した。だがその裏には、選ばれし者にしか見えない、空中に浮遊する庭で会った妖魔との約束があった…。

9784086007597

ISBN4-08-600759-2

C0193 ¥419E

1920193004199

定価 本体419円＋税



コバルト文庫